
ドラゴニック・クレイモア

あるるかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴニック・クレイモア

【Nコード】

N8265I

【作者名】

あるるかん

【あらすじ】

とある田舎町、武器屋の若き青年店主ディオヘル・マツケンジイは一人の居直り強盗に出会い、人生に一筋の風を吹き込まれる。名前を変えたい男と名前が欲しい女の烈風すさぶ物語。

竜、来る

ACT 1 Dragon's order

> i 3 3 7 1 | 5 5 1 <

田舎の空はぬぼっと見上げるのにちょうどいい。

王国の一隅、王都から少し離れた、そこそこに整備され、そこそこに繁栄した、そこそこ田舎の、そこそこの町。時たまそんなことを考えながら、マツケンジイ武具商店の軒先で、ディオヘル・マツケンジイは空を仰ぐ。都会の空は狭く、辺境の空は孤独だと言う。ならばこうして、住み育った町の親しみすぎるような空を見上げるのがちょうどいい。適度に狭くて、適度に孤独だ。

この日の空はどんよりと曇っていて、それでいて雨も降りそうに無い。夏ごろによくある、シルクのカーテンをかぶせたようなうっすらとした雲だった。あの日もこんないやな空だった、と彼は回想する。

ディオヘル 親しい者の呼び方に習うならディオ、がこの店を継いだのは18の時、とは言っても、継いだ、といえるのかどうかはちよつと定かではない。どっちかというと押し付けられた、に近かった。朝、いつも通りに起きて、テーブルの上にあったその置手紙を見たときは確かにそう感じたのだし。

「後は任せた！」

コレが、仮にも三代続いた武器屋の店長の残す置手紙だろうか？
脳みそパープリンな父親は溺愛する自らの妻を半ば掻つ攫うようにして旅立った後だった。いや、少し前から「新婚旅行に行きたい」「おまえを産んだせいで行きそびれた」などと愚痴り倒してお袋にしばかれていたけれど。まさかこんな。一抹の疑いも困惑もなくあのクルクルパープリンめチクショウ、と納得できる親子関係にげんがりしながら見上げた空も、こんな風にいやな空だった。ようやく十八になって改名権を得、この大仰な貴族風の名前をピエールとかジャックとかにしようと思っていたのに。親の署名がないと三十まで改名できないと知って、ディオはこの上なく落ち込んだ。

そしてひとしきり落ち込んだ後は、厄介ごとが追いかけてくるのが世の常だ。せいぜい数週で帰ってくると思っていた両親は、一月二月、半年待っても帰ってこず。今では一年に一度、はるか彼方の南国からの葉書が届くだけ。完全に隠居気分のラチガイパープリンに替わってディオは武器屋の営業に忙殺され、あつちに走りこつちに走り、碌な恋愛もせず四年もたって、ああ畜生女の子の手を握ることもなく二十歳をこしちまった。あんだよ、やめろよ男友達連中、そのにやにやした顔をやめろよ！ しかも何だよこの親父直筆の真つ赤な帳簿は！？ お袋が管理してたんじゃないのか！？ ひよっとして！ その、イケナイ所に武器を流しておられた……？

必死で後始末に奔走し、あちこちに頭を下げまくり、ちよつとうらぶれた取引相手の方に「はじめはウチの先代に取らせませす。ええ、命でも何でも」と少し乗り気で約束して。

紆余曲折、今は何とか食っていける経営をしている。なんだ、や

るじゃないか自分。

「どうした、竜でも飛んでるか？」

誰も褒めてくれない自分の半生を振り返っていると、横合いから嘲笑交じりに声をかけられた。声の主なら見なくてもわかる。きつとそいつは憲兵の制服を着て、長い髪をもっさり束ねている。

「早々飛ぶかよヴァレリー。神父様曰く、神は天に居まし」

しかし何もなさらない。と結んで、振り向く。予想通りの、正式装備を生真面目に着こなした女憲兵が立っていた。

武器屋は扱うモノがモノだ（人外パープリンは自覚に欠けていたが）国に登録した商店以外営業は許されず、そのうえ営業中は町役場の憲兵に監視される。ディオの営むマッケンジー商店も例外ではなく、毎日この女憲兵、一応幼馴染のヴァレリー・クロケットが警備に立つ。ちなみにディオは幼馴染と思っていない、親父の帳簿を始末しようとしたときさんざ生真面目に見咎められたからだ。なんだよ俺がやったんじゃないやねえよ、見逃せ、頼むから、お願い。と土下座までしたのに頭を踏まれ無碍に断られたのは記憶に新しい。一生根に持ってやる。

そんな理由で今日もこの女憲兵はディオの店先に立って、何も起こらない田舎の商店を警備している。立ちっぱなしというわけにも行かないので休憩時間は店の二階の自宅部分を貸してやるし、たまに朝飯まで作ってやってるのに、暇に溺れていらつくのか、ディオが平穩に空を見ていると、さっきのように毒舌を吐いてくる。

「そうか、てつきり童貞をこじらせて妖精が見えるようになったの

かと」

訂正、いつでも毒を吐いてくる。

「うるせえ、俺にはまだ八年ある。望みは消えてねえ」

「……そうだな、あと八年”も”あるな」

「優しい目で見るとるんじゃねえ！」

ちなみにこの地方では純潔を保って三十になると魔法使いになるというまことしやかな伝説がある。

「知ってるか、最近近所の娘たちはお前をあがめている」

「な、なんでだ……」

「うむ」

唾を飲むディオに、意味ありげにうなずいて、一言。

「”モテない感じ”はお前が全部吸ってくれる！」

「そいつらここに呼んで来い！」

娘たちというワードに期待してしまった切ない純情も返せ！

「というかまだ22なのになんでそこまで言われなきゃならないんだ！」

「残りの八年が容易に想像できるからだ！ お前は合わない殻をしようとしたヤドカリのように、この商店を転がすのに必死になって手も足も出ない！」

「若干詩的に表現できたからっていい気になるなよ！ あ、やめろ！ そのしたり顔をやめろ！」

ディオに言わせれば向かいの酒場の柄の悪いのもいけないのだ。健全な酒場なら可愛い給仕の娘とか居て、ちょっと遅れた帰り際「お嬢さん、もう暗いから泊まっていきなさい」なんて言えたかもしれないのに。聞こえてくるのはもっさいオッサンの叫び声だけだし、働いてるのも似たような筋肉質のクリーチャーだけだし、今だつて昼間だつてのに中からけんか腰の大声が聞こえてくる。騒音で訴えてやろうかなんて恨みがましい視線を向けると、心中を察したらしいヴァレリーが微笑みながらこう言う。

「未使用は国家に対する反逆だ。国民には次世代をはぐくむ義務があるからな」

「お前は血も涙もねえな!？」

「知ってるか、童貞は死にいたる病だ」

「ウソつけ! …… ウソだ! ウソだといってよヴァレリー!？」

「敵を貫いたことのない槍はなんて叫ぶ？」

「俺に戦う相手をくれ! もうやめてくれ泣きそうだよ昼間から!」

「知ってるか」

天下の往来で何てこと言っただこいつは、と慄くディオなど知ったこっちゃない、と毒を吐き続けた口が、いったん言いよどむ。

「……パン屋のジェフリは今週末が結婚式だ」

「……今週末なんだよなあ」

そう、今週末、ヴァレリーとも共通の友人の、言ってしまうえばディオと同じ年の、パン屋のジェフリが美人の嫁さんをとっ捕まえる。

「俺と夜通し裸エプロンについて語ったジェフリがなあ……」

「させるんだらうな……」

「だらうな……泣いて頼んで着て貰うんだらうな……」

あのジェフリがなあ……、と二人して遠い目をする。幼いころの思い出をたどっているのも多少あるが、何より自分の身を振り返ってだ。ディオの方は言わずもがな、こんな風にねちねち言い立てるヴァレリーだって女だてらに憲兵なんてやってるし、何より堂々と童貞だの未使用だの言っちゃう性格だから似たようなものだ。実際、それをディオが言わないのは、昔からコイツがいじめた相手に毛虫の大群をひつかぶせるような奴だからというだけで。

「焦る、な……」

「ああ、焦る……」

どちらともなく口にする。ああ、どうしよう。あと何人だ同じ年でろくに経験のないのは、自分たちを入れて、三人、いや、もうこの二人だけ……、ああそうか、もうこの二人しか余ってないのか……。

そんなネガティブな思考を裏にして、気がつけば話はジェフリのよくない思い出羅列大会になっていた。あいつ八つの時風呂覗いて捕まったよな。そうそう、そのころ鬼ごっここの最中に肥溜めに落ちて暫くあだ名がミスター不潔になった。そうだよ、その間秘密基地に入れてもらえなくなっただよな。んでもって悔しくて秘密基地の上から、木に登って小便を……。

木で編んだちやちな屋根をすり抜けて、暖かい液体が垂れてきた阿鼻叫喚に思いをさせたその時だ。向かいの店の喧騒がピークに達し。玄関先から二人の男がもつれるように転がり出てきた。続いて、一人、二人、あつという間に合計八人。

「仕事だぞ憲兵」

「わかってるよ。つたく、昼間ッから」

ヴァレリーが面倒臭そうに手を差し出す。

「武器」

「グレイブやらが未テスト」

「それでいい」

店先のグレイブ 薙刀を引っつかんで放り投げると、それを受け取った女憲兵はあっという間に、八人の始まるか始まらないかという喧嘩の渦中に飛び込んでいく。

まずは一閃。ニメートルほどもあるグレイブを軽々と振って一人の頭を捕らえる。峰打ちだろうが、鉄の塊をまともに頭にくらい、相手は地面に崩れ落ちる。

「しなりが悪い」

「男向けだな。今年のノンフェザはそういう戦略か」

こちらにほうられた薙刀と批評をうけ取って、別の一本を投げる。

暫く何がおきたのかわかっていなかったのだらう、ポケットと突っ立っていた酔客がようやく喧嘩相手が増えたことを認識し、息を振りまき拳を振り上げる。さらに、一閃、二閃、三閃。二人の足を打ちつけ、一人から小手を奪う。かがみこむ連中を尻目にディオの方へ振り向いて一言。

「こんどはしなりすぎる。頭も重い」

「女向け……じゃないな、玄人好み」

ぺ、とポケットから出したメモを貼り付け、さらに一本、今度は片手剣を。背後から迫る男の鼻っ面に柄頭で一撃。鞘から抜かずに一人の懐にもぐりこんで鳩尾に刺突。振り向きざまにもう一人の喉を一撃。駄目押しに、左拳を酒気で真つ赤な顔面に。

「罎が広いな。取り回しづらい」

「調整するか」

そして最後の一品を投げる。

受け取ったそれをヴァレリーは正眼に構える。最後に残った暴漢は、やっとこさ相手が憲兵であることに気がついたらしい。右を向き、左を向き、やがて逃げられないことを悟り、口から泡を吹いて腕を振り回しながら飛び出してくる。ヴァレリーは大きく動かさず、ただ一歩右に踏み出し、すれ違いざまに、

一閃。

どさり、と音を立てて崩れ落ちる人相の悪い男を見て、デイオは自分の商品の見立てにうなずく。

「うんやっぱりコイツでよかった」

ヴァレリーの手中で銀色に輝くラストウェポンをみて、満足。

「ベンディおじさんとこのお玉は丈夫だ」

パッカーン、といい音が店先に響いた

「いつてえ!？」

「アホかお前はっ!　なんでこの流れで最後にお玉なんだ!」

「しょうがないだろ!？　一番の得意先から頼まれてるんだから!」

最近ねー、旦那をポコポコポコやってたらお玉がへこんじゃってねー。という近所のおば様方の要望で入荷した新商品。隣町のペンディおじさん謹製の丈夫なお玉。

その他売れ行き商品は、大型金ダライ、お鍋の修繕、包丁の研ぎなおし。

「お前にプライドはないのか武器屋の息子!？」

「んなもんとつくに食い扶持に取って代わったっつーの!」

四年間、未熟者一人で回すには小さな個人商店でさえ難しく。

気がつけば、マツケンジイ武具商店は金物屋に落ちぶれていた。

「情けないぞ私は!　なにより高々包丁ときしか仕事のないこんな店を見張る自分が情けない!」

「じゃあ盗賊相手に横流ししてやるうか!　大口だぜ大口あつという間に大金持ちだぜ!？」

「私の目が黒いうちはそんなことさせるか!　王国騎士団のお抱えになるくらい言ったらどうなんだ!」

「なれるモンならとつくに王都に越してるよバーカバーカ!」

喧嘩の原因やその後の処理も忘れて、ぎゃあぎゃああと死屍累々の酔客どもの真ん中で低レベルな舌戦開始。「バカドバカ超バカ!　だから私はお前が嫌いだパープリン二世!」その名で俺を呼ぶ

なあ！」「うつさいジュニア！ やーいやーいお前もそのうち脳みそスポンジ男になるんだー！」「ならないね！ 俺の血はお袋100%だね！」何事かと人も集まり始め、それが見慣れた二人だと気づくとやいのやいのとはやし始める。

「こりねーなーモヤシ店長と鋼鉄女」

「うつせえ！」

「ほかの事に精出せアマリモンズー！」

「今の誰だ！ 殺すぞ！」

「いつそくつつけー！」

「御免だ！ 死んでも！ どけこら野次馬！」

息の合った動きで人ごみを掻き分け、外に出る。鼻息も荒く二手に別れ、デイオは再び

店番へ、ヴァレリーは事情を聞くため酒場の中へ。

「……うつせえんだよ、どいつもこいつも」

情けないなんて、言われなくても分かっているんだ。

そんな苛立ちを抱えて、また空を見上げる。知らないうちに雲に一筋の切れ目が入り、暖かい光が差していた。

なんだっけか、ああいう天気を呼ぶ、古い名前があったはずだ。

そんな他愛もないことを無理に考えて、苛立ちにふたをしようとする。いまいちうまくコントロールできないまま、店のよるい戸を開ける 一つの間閉めたっけ？ 窓の無いせいで昼間でも暗

い店の中に、座り込んだ人影がある。胡坐をかいて、柱のような棍棒のような、奇妙な道具を抱えて。人影がこういう。

「こんにちは、居直り強盗なんだが」

意味を理解するまでたつぷり十秒。

危機を理解するまでその上十秒。

その間に唐突に倒れた人影を助け起こすまでさらに十秒。

疑問符にまみれた頭の中で一つ、間の抜けた考えがまとまった。

そうだ、竜の駆けたような雲、と言っただった。

竜、名乗る

「腹と背中に裂傷。左腕の骨に異常。その他細かな切り傷打撲が体中に多数」

店の二階廊下、小さな金ダライ（ペンティ印）に数枚の手ぬぐいを浸して抱えたヴァレリーが、使われていない部屋から出てきてデイトに報告する。水で満たしていたはずのタライは真つ赤に染まり、その中の人物 自称居直り強盗、実質行き倒れ の現状を言葉よりもありありと伝えてくる。

突然店先上がりこんでデイトの言葉も待たずにぶっ倒れた不審人物を、とりあえずヴァレリーと二人がかりで運び込んだのがついさつき。一通り手当ての心得のあるヴァレリーが様子を見立てるのをデイトはじっと待っていた。

「一応重症だが、医者に連れて行くほどではない」

「わりいな」

「気にするな。仕事だ」

礼金をくれるというなら遠慮はしないがな、と嘯く国家公務員にじつとりとした低所得者眼光線をあびせる。そんな金があるならもう少しましな商品を入れてるよ、いや、その前にペンティ印シリーズを充実、あ、違う、二階の雨漏りが先。そうだ運び込んだ時垂れた血の始末もしないと。モップと、バケツと、しみになったり腐ったりする前に済ませないと。しんどいなー、一日バカみたいに眠り倒したいな。こんなとき無性にお手伝いが欲しくなる、いや、もういいや、取り繕わない、カミさんが欲しい。

「……どうした、台所隅のカビパンみたいな目をしてるかと思ったから突然涙ぐんで」

「なんか、哀しみが不意打ちしてきた……」

持ち込んでいた椅子に座り込んでカツカツカツ、とつま先を床で鳴らす。畜生、こんな、戦略的な襲い方しなくても常々打ちのめされてるって言うのに……。

「出会いが、出会いが欲しい。クソ、ジェフリの野郎……」

「落ち着けディオ！ 深呼吸だ！ 一時の感情に飲まれるな！」

「ああ、そうだったな。式だ、結婚式の時にこそこの気持ちは発露するべきだったな」

「わかってくれたならいいんだ」

「覚えてるあのスケコマシ、これ見よがしに俺とヴァレリーで連名の招待状なんて送りつけてきやがって」

アマリモンズで揃ってやって来い、おこぼれくらいはくれてやるよおあつはつはつはあ！ と高笑いする女の敵ジェフリの邪悪な顔が目につかぶ。こんな奴だったかどうかは定かではないというかもっと気弱な奴だったというか多分他の友人連中が首謀者だろうとかそういうのは無視だ。

「夫婦に送る形式だろうがあれはよお！ 何だ何の嫌味だよ死ねよジェフリっ！」

「……いや、私としてはそれは別に怒るところでないというか、悪い気分でないというか」

「日和るなヴァレリー！ 心を強くもつんだ！」

「うん、まあお前はそういう奴だよな」

「……？ おうよ！」

「……だから私はお前が嫌いだ」

「なんで!？」

「いまいち腑に落ちないが、とりあえずといった感じにため息をつかれた。理不尽だ。一応発足したばかりの「ジエフリに裸エプロンを許さない会」の二人きりの会員で有る以上もう少し待遇の改善を要求したいのだが。」

「まあいいや、披露宴のときに見境なく料理をむさぼり倒すのに協力してくれば。とそこまで考えて、先ほどまで部屋の中の人間を思っていたときの緊張感がないことに気がついた。」

「……つまり、無視してこんな話できる程度って事なんだな」

「わかっているじゃないか」

「よかつたよ。死に目を見たりとか、そういう厄介なことにならないくてさ」

「旅人は多い。一応王都に近いこの町は、一生に一度の王城詣でなんて酔狂をやらかす連中の通り道にもなっている。大抵の連中はわき目も振らずに通り返し、たまに変に力尽きて、ここでダラダラと旅塵を落とそうと酒びたりになって金欠になったりする。」

「山賊や狼に襲われて、ぼろぼろの布切れみたいになった」生きた死体”が片足引きずってやってくる事だってある。」

「そんな剥製にしたいくらい絵に描いたような親不孝者の盛大な自爆行為の終焉を見ることになるよりかは、まあずいぶんと上々な結末だ。素直にそう思ってディオは肩の力を改めて抜く。」

「我ながらわかりやすいかと思っているとあからさまにヴァレリーがほほえましげな目で見てきたので、あわてて意地汚い話を探してつ

くろった。

「救民法の適用もあるかな」

行き倒れた旅人や浮浪人への施しに対して一定の報奨金が支払われる法律だ。小銭を恵んだ程度では審査どころか窓口で説教されるのがオチだが、この分なら。

「あるだろうな。旅の身だろうし、怪我の手当てもしたし、この分なら飯の一つも食わせることになるだろ」

「食えるの？」

「多分な。一筆書いてやるから、一段落したら本人連れて役場まで持って来い」

「……食うの？」

飯を？ つまり、金を？

自慢ではないが、金物屋に落ちぶれた武具屋に満足な金があるはずもない。

そんなに切実に貧乏なわけではないが、食い扶持が増えたりしたら、したら。

「今月、お前は嗜好品一切なしだ」

という、ヴァレリーの一言で心が決まる。

「よし、捨てよう」

「そこまで！？」

「考える！」

目を剥くヴァレリーの肩をつかんで、ディオは力強く訴える。

「今月、通販、禁止、だとしたら……」
「ぐっ!？」

ディオは知っている。今町の女衆の間では首都との通販カタログを皆してキヤーキヤー言いながらめくるのが大流行なのだ。そして目の前の女丈夫が毎月末の「自分へのごほうび」と称するささやかな買い物に心待ちにしていることを。

「な、ヴァレリー？ 宿屋の前においていこう。手当てもしたんだ恨まれる筋合いはないさ」

「う、だが、しかし……」

「大丈夫さ、官憲のお前が少し目をつぶってくれるだけで、俺は台所を食い荒らされずにすむんだ。な？」

ぐぐぐぐ、と顔を寄せて熱弁。

「だがな、その……」

「なんだよ齒切れ悪いな顔の近いのが気になるわけでもあるまいし」
「！」

ひよつとしたらつばでも飛んでたか？ と懸念する中、ふるふる
とヴァレリーの手が拳がり、ディオの背後を指差した。

「当人に見られちゃ、つぶ、くっ……見逃せないなあ」

ドアの影から、人影がこちらを伺っているのを見て。

ディオは決まりの悪さだけで人は死ねると学んだ。

「……どうぞ、遠慮せずに食べてください」

「いや、その、あはは……」

「あは、あはは、ははははは、はあ……」

と、食卓に着いた【自称居直り強盗氏】が引きつった笑いを浮かべるのを見て、そりゃそうだとディオもまた笑うしかなかった。あんな会話を聞いた後に「じゃ遠慮なく！」とがっがっ食えるやつが居たらそいつはきつとどこに行っても死なない。いざとなれば犬の小便のかかった雑草だろうともりもり食ってしまうだろう。

自分の父親がいくらでもそうできるタイプの人間なのを思い出してげんなりしながら、食卓に食材を並べていく。いためたベーコンの皿とオムレツ、自家製の木苺ジャムはペレーネという細長いパンのそばにおく。今朝包丁研ぎに行った家のいくつから料金代わりにもらった野菜をとにかくぶち込んだおぎつぱなスープに井戸水で冷やしたサラダまで付いて、こんなに豪華な食事はディオ一人の昼間では絶対に料されるはずのないものだった。

「なんだディオ、あれはないのか、果物は。今ならスモモが旬だろう」

「なぜお前は席についてますか」

当たり前のようにナイフとフォークを前にしたヴァレリーにじっとりした視線を向ける。

「診察代および日々の迷惑料だ。たまにはもてなせ幼馴染」

「お前の面の皮を素材にくれたら考えてやる」

さぞかし硬く分厚いクレイモアが作れそうだ。

と、そこまで軽口をたたいたところで、くつくつ、と二人のものではない笑い声が忍び漏れて、注意を引く。

「……それに」

そちらを見ながら、ヴァレリーが言う。

「お前が不正に旅人をほうりださないか監視しなくては」

旅人、とヴァレリーが称したのを聞いて、忍び笑いしていた人間の視線が不意にディオに向かう。

居直り強盗、と言ったことに関してはヴァレリーには言っていない。

軽くうなずいてみせる。

「……いや、不正だなんてとんでもない。ディオヘルさんと憲兵様には礼を尽くしても尽くしきれません」

まるでなにかの合図だったかのように席を切り出して、その人間はしゃべりだした。

「女だてらに旅の身の上、路傍に転がることになれば一体どうなっ

ていたか。不躰にあまりこみその上看病まで受けたのです。これ以上を望めば罰が当たるというもの」

と、そこで声を区切って、旅人は立ち上がって左胸に握った右こぶしを当てる。

「このスレッダ村のイザドラ、出来る限りのお礼はさせていただきます」と、そう思っています」

ここらの地方では珍しい、透けるような色の肌と、光の粒が飛んでいるような金髪がゆれる。

イザドラ、と名乗ったその旅人の敬礼は、いかにもこの地方の挨拶を勉強してきました、という危なっかしさがいまだに抜けていなかった。

スレッダなんていう村もついぞ聞いたことがない、特徴からして北方の出身だろうか。とはいえ山脈を越えた向こう側でもないところまで白い肌にはならないだろうし、そうなるとこの国の人間ではないことになってしまう。王都からはるか北の大山脈は、その余りの険しさから自然の防壁となって自然と国境線の扱いを受けているのだ。つまり、ひよっとするとコイツはただの旅人でなく、密入国者である可能性さえある。

しかし、ディオには他の事が気にかかってしかたなかった。

「……女？」

「何だと思ってたんだ」

なぜかヴァレリーに睨まれてあわてて取り繕う。

「いや、だつてさ」

旅人 イザドラが暗い店内でぶっ倒れたとき、体には分厚くごつい板金鎧が纏われていたのだ。その上運び込んだ後の手当てがヴァレリーに丸投げだったので、鎧をはずしている姿を見るのはこの食卓が初めてなのである。傷の具合を聞く限りどうも傭兵が用心棒くずれかと思われたので、相手が女性、という状況はまったく想定外だった。

「道理で……男のくせに綺麗な顔してると思った」

「うれしいな、ありがとう」

「っ」

「どうかしましたか？」

「いや……。なんでもないよ」

言えない。

にこり、と微笑まれて、柄になくドギマギしてしまった、なんてのは、22の男が言っても気持ち悪いだけだ。

「んん！ んっんん！ んんんん！」

「……どしたヴァレリー、咽た？」

唐突に口に手を当ててせきを始めたヴァレリーに言うと、座ったままギロリ、とか音のしそうな目で睨まれる。

さつきよりはるかに強度が上がっている。

「なんだよ、まだ通販禁止の想像引きずってんのか？ ほらスマイ

ルスマイル」

「……いいから座つたらどうだ。立ちっぱなしってのもなんだから」

そう言われてまだ自分が給仕の格好のままなのを思い出す。さりげなく椅子をひかれたのにつられて、ヴァレリーの隣に座った。

……なんだろうか。

並んで座つた二人の前に、イザドラが肩身の狭そうな顔で座っている、この構図。

食事、というよりは、尋問のような。

その感想が間違っていないなかったことを、次のヴァレリーの一言で悟る。

「スレッタ村のイザドラ」

「はい」

「私は憲兵だ。憲兵である以上、いくつか君に質問しなくてはならない」

思わず口を挟む。

「……おい、ヴァレリー、病み上がりなんだから」

「お前はだまつてるリトルパープリン」

「りっつ……！」

「喧嘩は後だ。お前の言うとおり、彼女は病み上がりだ。腹と背中裂傷。左腕の骨に異常。その他細かな切り傷打撲が体中に多数。一応重症だが、医者に連れて行くほどではない。そういう傷を抱えた怪我人だ」

「だったらさ、ほら、いまは飯食って、体力つけて、それから」
「気づけ、察しの悪いやつめ。だから私はお前が嫌いだ」

あきれた顔で言われる。

もうディオに説明する気もないのか、ヴァレリーはさっさとイザドラに向き直って話を続ける。

「イザドラ、スレッジ村のイザドラ。君は怪我人だった。重症だが医者に連れて行くほどではない怪我人だった」

「はい」

「医者に連れて行くほどではないが 重傷だったんだ」

「……はい」

「それが何で、こんな風に食卓につける」

ようやく気づいたディオが息を呑むより早く、ヴァレリーが言葉を続ける。

「君は何で、そんなに早く《治っている》」

その言葉に、詰問に。

イザドラは一度目を閉じて、ゆっくりと開いた。

何か切ないものから目をそらすための、そういう動きで。

「それを説明するには、私の生まれたその瞬間から、説明しなくてはいけません」

そういうとイザドラは両手のこぶしを握り、胸の前で押し当てて

頭を下げた。

「私はスレッダ村のイザドラ」

「竜殺しの村に生まれた、竜の子、イザドラです」

竜、晒う

店先のよろい戸を閉め、本格的な店じまいの準備をしながら、ディオはヴァレリーに話しかけた。結局一通り飯をかきこんだ幼馴染は再び憲兵の制服に袖を通して、いまはディオが店舗側の扉にしっかりと施錠するのを見張っている。

こうしてよろい戸とディオのジイさんの代から使っている巨大な南京錠でマツケンジイ武具商店が封され、店の裏側の小さな勝手口でディオが消えるまでが、ヴァレリーにとっての「武具店監視」の仕事の時間だ。

背中にヴァレリーの視線を感じながら、背を丸めて鍵を落とす感覚。そこに、不意に声がかかる。

「……一週間待つ」

「いいのかよ」

「お前の拾い物だ。お前で管理しろ」

拾い物、というみもふたもない言い方に言い返そうとして、とどろつたりそういうものか、と納得する。憲兵にして唯一の【共犯】であるヴァレリーが黙っていてくれるというのなら、この問題はディオのものになるのだ。

鍵のかかった大きな建物を見上げながら、あの行き倒れのイザドラが語ったことを思い出す。

それは拳と拳をあわせる、北方式の挨拶から始まった。

「私の村には、一本の巨大な剣が碑文とともに祭られていました」

と、イザドラは語りだした。口を挟めないまま、ディオもヴァレリーも結局最後まで聞いたのだが。内容は荒唐無稽というよりかは、疑問の隙間を一つ一つ埋めていくような、妙に隙のないものだった。

「スレッダは何の変哲もない農村です。リユクレーフという英雄が竜殺しをなした、とされるその大剣と、リユクレーフの遺言といわれる碑文だけが他所と違うところで、それは村のみんなの自慢でした。わかるでしょう？」

そういつて、イザドラはわかりやすい苦笑を浮かべる。

「お祭りのたびにリユクレーフの御伽噺を延々聞かせるおじいさんが居るような、そういう何の変哲もない村です。毎年近くの町に麦を卸して、そのお金で嗜好品を買って。若者は町に出たいと考えて、何人かが行商人の方を追いかけて消えてしまうような、それでも村が回っていくくらい子供の多い、当たり前前の村でした」

「ああ、想像できるよ。碑と剣は丘の上に立ってるんだろう？」

「その通りです。そして誰かが花をそなえていました。いつもいつでも」

それはまるでありきたりな、目に浮かぶような農村の話だった。

イザドラが言ったような伝説のある村は珍しくもない。というより、ないところを探すほうが難しい。店柄旅の用心棒なんかとも話す機会のあるディオだが、誰でも必ず自分の出身地を自慢するし、その内容は特産品とご先祖様と決まっている。そしてご先祖様のお

墓か記念碑は村の一等見晴らしのいいところに作られるものなのだ。ディオの暮らすこの町にも弓と毒草で人食い熊を倒した獵師の話が残っている。最後が一緒だとわかっていても、季節の節目に必ず目を輝かせてしまうそうという話だ。

男の子がリクレーフの話を身を乗り出して聞いているあいだ、イザドラはほかのおませな女の子達と一緒に彼らをちよつと馬鹿にしながら、それでもいっしょに聞き入ってしまったのかもしれない。

そんな想像を先走らせながらディオはイザドラを促した。こくりとうなずいて女は続ける。

「スレッダはいい村でした。小麦の質がとてもよく、他所の町からも買い付けに来るほどで、おかげで町商人にいじめられることもない適度な取引を行っていました。私も当たり前のように、スレッダで大きくなって、スレッダで恋をして、スレッダで子供を生むんだと、思っていました。十二になった年、それが思い込みだったことに気が付きました」

「それが」

「はい」

懐に手を入れてイザドラは財布を取り出した。真つ黒に痛んだ一目でどこのものかもわからないほど痛んだ銅貨をつまみ出して、こちらに示す。

「? それは」

ディオの言葉をさえぎって、クシユ、と。音がした。

「神よ、お許しを賜りください」

「……嘘だろ」

「憲兵様もどうかお見逃し下さい。硬いものが見当たらなかったの
で」

いつそ白々しいほどの口調でわびたのは、それが重罪だからだ。

硬貨を故意に傷つける。

それも、指と指でひねりつぶしてしまうなんて。

律儀に神にまで許しを乞うたイザドラの前に、出来損ないの銅細
工になってしまった汚い銅貨が一つ転がった。

「十二の夏、私は暴れ牛を殴り殺しました」

「……」

「素手でした」

「それが……」

竜の子、の意味か。

口に出して確認するまでもなく、イザドラはうなずいた。

見ているディオまで悲しくなってしまうような、綺麗な笑顔で。

例えそれが何者であっても、あんな表情は二度と見たくない
と、素直にディオはそう思う。なにが嫌かって、そういう顔をした相手
を前にして、ディオには何もできないことがだ。そこでヴァレリー
がイザドラの体調を理由に話の終わりを促さなければ、笑顔のイザ
ドラを前にして、ずっと固まってしまっていたかもしれない。

イザドラのその後の話は、こうして施錠を行う片手間でもたやすく想像できる。

スレッダ村の光景よりたやすく。

「なあ男勝り」

「なんだ童貞」

ディオが背中越しに話しかけると、打てば響く返事が返ってくる。

「あれ、あのさ、悪魔憑き、だよな？」

「……………」

時折思い出したように、人々が忘れた頃に生まれくる、犬の耳が生えたり指が一本多い子供のことをそういうらしい。

ディオも話に聞くだけで、実物を見たことはない。

ただそれに対する、世間の風当たりは知っている。

「言い方が違ってても、似たようなもんだよな？」

「……………」

「じゃあ、周りの反応も、さ」

「そうだろうな。きつと、そうなんだろう」

「そう、だよな」

「ディオ」

「言っなよ」

ディオはすくと立ちあがった。まだ日も高いうちに店じまいしな

くてはならない損害を計算し、たいした損にもならない普通の営業成績に落ち込みかけて、凶太く頭から追い出した。そのくらいの神経の強さは、ここしばらくで身についたものだ。

背中に物いいたげな視線を感じても、自分の言いたいことをいえるくらいの凶太さ。

「なあヴァレリー、言うなよ。俺の幼馴染がそんなこと、言ってくるな」

悪魔憑きだから、追い出せとか考え直せだとか、そういう台詞を。たとえ言い出したそうな雰囲気だけでも、出してほしくなかった。

「……一週間だからな」

「うん」

「狭い町なんだから、それくらいも隠せるかどうかわからないぞ」

「わかってる」

「大体ばれたら私が危ないんだからな！ 職務規定違反とかそういう」

「わかってるよ、ヴァレリー。 あー、その。えっとな、」

言葉を強引にさえぎる。

「お前がいい奴でよかった」

振り向かなかったのは、陳腐な照れ隠しだと自分でも思う。

「ジェフリの結婚式、どうせだから一緒に出ようぜ。一人ずつで行くよりいくらかましだろ」

「ぶん」

いつの間にかヴァレリーはずいぶん近くに立っていたらしい。ぽす、と拳が背中^に当てられた。

「ディオのバカ、ばーか、あほー」

「……なんでこのタイミングで罵声ですか」

「わかってないのがお前だよな」

最後にぐりぐりとひときわ強く押し付けて、気配が離れていく。

「だから私はお前が嫌いだった」

店先でヴァレリーと別れて あの後感情の読めない妙な挙動で
憲兵詰め所へと帰っていった。 勝手口から店に入る。店舗部分
を素通りして地下の鍛冶場に通じる階段脇まで歩いていくと、一本
の鉄塊が転がっていた。

柱のような、棍棒のような。しかしよく見るとそれが、自分にと
って見慣れた形であることに気が付く。

クレイモア
大剣。

単純にほかより大きい剣、というだけでなく、そのふざけた重量
で金属の鎧でも断ち切ってしまう一種の兵器。

もしもディオの背丈ほどもあるこのクレイモアが戦場で振り回さ

れたなら、まさにそう表現すべき戦果と不幸を撒き散らすだろう、
そういう異様だった。そういえばイザドラが最初に倒れたとき抱え
ていたこれを、そのまま適当に放り出してそのままだったのだ。手
にとってみると想像通りに重く、冷たかった。刃こぼれがさまざま
く、一目で手入れされていないのがわかる。同時に納得する。

それもそうだろう。

正直、こんなもの武器屋でも手に余る。

ましてや今の自分では。

「つか、これじゃホントにただの鉄屑だよ……」

「そういうな」

背後から首筋に当てられた手は冷たかった。

「リユクレーフの頃は業物だった。時間には名刀だつて勝てないさ」

「……村の碑物で物盗り家業かよ、いい趣味だな」

「村を出る時押し付けられたんだよ。それに居直り強盗は今度だけ
だ」

物音どころか、気配さえ髪一筋も感じさせずに、イザドラがデイ
オの首に手を当てていた。

その手が首筋を這うように、つかむ。

「傭兵家業で殺しは慣れたが、素手は、なかなかない経験だ」
「！」

恐れるほどの力はこもっていないが、手元のクレイモアの様に
ややかで冷たい感触のこの手がどれほどの膂力を潜めているのか、
ディオには痛いほど想像できる。

硬貨を故意に傷つける。

それも、指と指でひねりつぶしてしまう。

なら、手のひら全てで人間の首なんて。

「そう力むなよ。仲良くしよう、ディオヘル・マツケンジイ」

「この状況で友情を育めるのは聖者か神か図抜けた馬鹿だ！」

「なら今から馬鹿になれ。そうだな、要求その一だ」

同時に、ぐ、と力が込められる。「1足す1は？」

「……2」

ぐっ。

「おっぴよっぴよー！」

「よろしい。大変馬鹿だ」

この上ない屈辱だった。

今なら憤死という死に方の機構を解明できる、とディオは確信し
た。

「ど、どれだけ猫をかぶっていやがったんだ。別人じゃねえか、ま
るっきり別人じゃねえか」

「憲兵を向こうに回して大立ち回りする器量はないからな。君も話をあわせてくれたから実に助かった」

「あわせ、って」

「言わなかったんだろ？ 居直り強盗と。宿屋の前に放り出すつもりだけして、あとからその地下室にでも連れ込むつもりだったのか？」

鍛冶場への階段を、顎で指す雰囲気だけが伝わる。

「とんだ悪党もいたもんだ。まったく私なんて可愛いものだ、まだ何も盗っちゃあいないんだから」

もつとも、今から君の命をかすめ盗るかもしれないんだが。と冗談めかした口調で言われても、まったく笑えやしない。

「まあ欲を聞いて失敗するのも商人の勉強だろう、そう落ち込むなよ武器屋の店主

。私の話を聞いてくれれば丸く収まる」

「要求、その二つでわけか……」

「そうだ、まずはそのクレイモアを手入れして欲しい」

「高いぞ、行き倒れに払えんのかよ」

「文無しだから君の命で支払おう。ちょうど手持ちがあるんだ」

「……冗談が下手だな、さっきから一つも笑えないぜ」

「無骨物なのさ、手加減だとか、華奢なものを扱うのも苦手さ。だからあんまり挑発はするな」

「俺も同じだよ、特に女が苦手なで触られたりするともうドギマギだ。首に手を這わされたりしたらゾクゾクしちゃう」

「気が合うな？」

「仲良くしようぜ」

「この状況で友情を育めるのは、聖者か神か図抜けた馬鹿だ」

「おっぴょっぴょー！」

「よろしい、大変なバカだ」

イザドラがケタケタと晒った。

なにが嫌かって、そういう顔をした相手を後ろにして、ディオには何もできないことだった。

竜、語る

ひとしきり笑ってディオの首筋から手を離したイザドラには、すでにその愉快そうな声音を隠すつもりもないようだった。どうにもこの女が五、六回転分はひねくれた性格の持ち主のようだ、ということもディオは嫌でも認識する。いまだに手の感触が残る素直な首筋を撫でながら振り返ると、イザドラは幽鬼もかくやといった薄ら笑いでこちらを見ていた。すらつとした腕を組んで、ディオの対面の壁に背中を預けている。

「……うん、大丈夫みたいで安心したぞ。初めてのことで手加減を間違えるかもしれないと思っていた」

「人の命を迂闊に扱うな……」

「イメージトレーニングはしたぞ？」

「人の命を適当に扱うな！ もっと丁寧なことを進めろよ！」

「十分丁寧だと思わないか、強盗にしては。こんな前提で話をする機会があるとは思わなかったな、ワクワクしてしまう」

「そりゃ重畳だよ……」

「そう景気の悪い力才をするな。美男子が台無しだぞ」

「お世辞だろ」

「お世辞だがな。で、仕事場はどこだ。剣を運ぼう」

「要らないよ」

そういうとディオはゆっくりと息を吐いて、足元の鉄塊　イザドラのクレイモアの柄と思しき場所を握り締めた。

「……おいおい、見栄を張るなよ。いいから仕事場を」

「仕事場に他人は入れない」

「それこそ見栄だろう。つべこべ言わずに」

イザドラの文句はそこでピタリと止まった。

「なんか言ったか？」

「……つべこべ言うのは悪癖だ、と自己をかえりみていた」

片眉を吊り上げて、イザドラはようやく笑みを収めていた。

目の前の優男が、軽々とはいえないまでも自分のクレイモアを持ち上げて見せる。

そういう光景に少なからず驚いているんだろうと思うと、ディオの心中にすがすがしいものがあつた。

ディオが峰を当てるように肩に担ぐと、イザドラが喋りだす。

「君も、ひよつとして悪魔憑きの類なのか。殺めの業を売る武器屋には多い、と聞いたことが……」

「坊主の説教を聞きすぎだ。それなら軍人の子にゃみんな猫耳が生える」

広いとはとてもいえない廊下ではこの剣は取り回し辛く、少しの難儀をしながらディオは答える。

「物事には骨があるんだよ。肉屋は解体のコツを、革靴屋は革細工のコツを、武器屋は刃物沙汰のコツを知ってる」

「そんなものでどうにかなるのか」

「どうにかなる。爺さん婆さんが寝物語代わりに聞かせてくれた」

ほかにもそれからの生活のうちで体感し、体得していった武器屋のコツは数知れない。重たい武器類を確実に支える方法や、得物と持ち主の体格から有効に武器が働く範囲を見抜く方法。単純な鍛冶技能も父親よりも祖父から受け継いだもののほうが多いといっている。今もディオは尋常でないクレイモアの重量を、体全体を通過して地面に支えてもらう。

「ひどい剣だ。どれだけ手入れしてねえのか見当も付かねえ」

「……どこで頼んでも目が飛び出るような値段をとられてな。ぼったくられるのが馬鹿馬鹿しくていつからかやめてしまった」

「バカ、ぼったくりじゃないよ。適正な値段だ」

武器というものには型式がある。刀身の形、製法、使用する鉱物。剣といってもシャムシユルやフランヴェルジュといった変り種があり、さらには刃渡りの長さなどでも細かく規定され、さらに各商店で受け継がれる、それぞれに対応したマニュアルが存在するのだ。勿論武器それぞれで個々人に合わせた微調整はされるが、操るのは結局人間なのだから、根本的に大きな違いはないものになる。

その点このクレイモアはひどいものだった。ディオの知る限りマッケンジイ武具商店にこのような形式の武器を扱った事例はないし、多分店中のどの文献をひっくり返しても同じパターンの仕事についてはかかれていないだろう。なんせ御伽噺の英雄の得物だ。それを仕上げようと思うなら時間と手間が湯水のように必要になる。

ここで重要なことは、手間も時間も商人にとっては金と同意義、ということだ。

「まともな商人でもコイツは扱いに困る。ましてやウチみたいな弱小ならいうまでもなく、だ」

利を優先する、という最低原理を忘れることは商人にはできない。それを怠るといふことは今までに蹴落とした競争相手に唾を吐く行為となる。

しかし、時に金子より優先される取引がある。

「だが、命を盾にとられちゃしかたねえ。渋々、嫌々、やってやる」
「……やりたくて仕方なかった、という顔で言われてもな」
「言ってやがれ」

そういつてディオは地下室へ向かうが、本当はわかっている。

暗い暗い階段を下っていく間。ディオは自分のにやけた口元を、必死に抑えようとしていた。

武器屋というものは違いなく刃物狂いになるとまことしやかにささやかれる。それは命を殺める道具を売るたびに、悪魔がその売った刃を使って魂を少しずつ削っていくかららしい。先細りになった魂は均衡をかいで、刀身の輝きに魅入られる異常な性質を備えていくそうだ。

いつごろからそんな迷信が広がったのか知らないが、ディオの爺さんの爺さんが洩垂れだった頃には、とっくに武器商人は金物を造る鍛冶工房からつまはじきにされて、全く独立したコミユニティを築くにいたっていたらしい。それとほぼ同じ頃に絶えず国からの監

視が付くようになり、現在の衛兵付きの営業体制が整ったと聞いている。

もちろんそんな商売の肩身が広いわけもなく、マッケンジイ武具商店のような近所の包丁研ぎだけが仕事の店ばかりでもない。時代によっては国からの迫害をつけることもある武器屋たちはそれぞれに連絡を取り合って巨大な職業組合を形成しているのだが　いまのディオにはどれもこれも些事だった。

自分は刃物狂いではなかったはずなのだが、と言いつつしながら仕事場へクレイモアを運び込み、再び一階へ戻ってきたディオにイザドラが突きつけた「要求その三」

「結局そんなに食えてない。飯をくれ」

「……仕事場には鍵かけたからな。テメエの得物が惜しかったらもうちょっと神妙にしろ」

「その鍵は暴れ牛より手ごわいのか？」

「んなわきゃない。」

保存食と貨幣が羽を生やして飛んでいく姿を幻視しながら、ディオは再び台所にたつ羽目になった。

「さつきみたいに豪勢じゃなくてもいいぞー」

「あたりまえだ！」

食卓に着いたまま生意気なことを言うイザドラにディオは干し肉を千切りながら言い返す。適当に塩を振って味付けしてから数本の黒パンと一緒に運んでいくと、待ちに待っていたという顔でイザドラが手をすり合わせていた。

「っふふ……ああいう豪勢なのもいいが、こつこつ粗食のほうが私はそそるな」

「あれは普通晩飯の品数だ」

「とうがかあんなに豪勢な代物を怪我人の前に出して君はどうするつもりだったんだ。普通はもつと病人食みたいなものを出すだろう」

よっぽど動転していたんだな。と苦笑されてむっとした顔を作る。

「ん？ 気にしてるのか？」

「うるせえ、つか普通に話しかけてくんよ。強盗と被害者だぞ」

「さっき仲良くなったじゃないか。なあもう一回言ってくれよ。おっぴょっ」

「黙って食って寝る怪我人。これは友情にのつとつた気遣いだ」

「わかったわかった。君は意外と可愛いな」

クツクツとひとしきり笑ったあと、意外に丁寧に「いただきます」と礼を言っただら、干し肉にかぶりつく。黙々と粗食する音が、しばらくの間食堂に響く。

手持ち無沙汰になったデイオはとりあえず対面の椅子に座って、一心不乱に食を行うイザドラを見ていた。

相変わらず顔は綺麗で、金髪も自ら光を放っているかの様に美しい。だがよくよく見れば顔の目立たないところにうつすらと傷跡のようなものが見て取れた。「竜の子」とやらの体質で傷の治りが早いからこそ目立たないのだろうか、と考えて打ち消す。今まで正面から見て築かなかったということ、さりげなく目立たないような髪形になっているのではないだろうか。

髪が伸びるたび鏡とにらめっこして苦心するイザドラの姿を想像し、それ以上考えると引き消せない深みにはまるような気がして、ディオは即座に頭に浮かんだ景色を振り払った。

どれほどそうした沈黙が続いただろうか、消えた黒パンの重量についてディオがそろそろ考えたくなかった頃に、イザドラがつぶやいた。

「君は」大皿に盛られた黒パンをまた一本手にとって、言う。

「君はもう少し私に恐れおののか、憎悪を向けるべきだと思う」

「……そうだな」

「そのくせに余裕だ」

視線をじつと手元に固定したままのイザドラの表情はディオには読めない。

「その余裕は、さっきの【コツ】があればどうとでもできる、という自信か？」

「……ああ、多分そうだと思う」

密着されているならともかく、一対一で落ち着いていれば一目散に逃げるくらいのことではできるだろうとは思っている。そして憲兵の詰め所に飛び込めばそれでいいのだ。

「それにヴァレリーも得物さえあれば何とかできると思う。あいつが長柄物をもつたら力なんて関係ないよ。脳天ぶち抜かれて一発だ」
「だが、さっきは素手だった」

そう言われてディオは黙り込む。確かに食堂にも台所にも、リーチを無視できるほどの長い棒は置いていない。

黙りこんでいるとイザドラが顔を上げて、見慣れつつある薄笑みを向けてくる。

「なんだ、いざというときに備えて女を逃がした、ということか。存外と気立てのいい男だったんだな、君は」

「……飯食ったとたんに評価が甘くなってるないか」

さっきまでは連れ込んで乱暴するつもりだったんだらうとか言うてきたくせに。

現金なやつめ。とディオがあきれて見せると、したり顔でイザドラがうなずく。「まあ、その可能性もぬぐいきれない」

「とはいえ君がそういう卑劣漢に見えなくなってきたのもたしかだ」「案外簡単な人間だな、お前」「そういうな、惚れっぼいんだ」

咽た。誰がって、ディオがである。

人は唾だけでこれほど危機を感じられるのかというほどに咳き込むディオを尻目に、イザドラが続ける。

「可愛い反応をするな君は。そう照れるな」

「びっくりしてるんだ！」

「君は優しくて良い奴だ」

「なあそれは何がきっかけの方向転換なんだ！？ 頼むから何をたくらんでるのかはつきりしてくれ！ 心臓に悪いんだよ！」

「たくらんでいるなんてそんな疑り深い。傷ついてしまうぞ。私は、私は……」

イザドラは心苦しそうに胸に手を当ててしなを作る。

「私は、ただ……」

「……」

「ただの愉快犯だというのに」

「最悪だ!？」

「ちよつとバカな童貞をからかってみたいという幼げな乙女心……」

「そんな残虐心が全女性に標準装備されているというのか!？」

「え、あれ、ひよつとして本当に童貞……?」

「申し訳なさそうな顔をするな!」

ここまで一切厚顔不遜だったイザドラが、初めて反省の色を見せた瞬間だった。

「……いいよ、もういいよ、殺せよ。俺を殺せよ……」

「何もそこまで……」

「お前にわかるかよつ! 二十三にもなって経験のない男の悲哀が!」

「あー、私も同い年だが経験はないぞ」

「んなことぶつちやけて慰められると思うなよ……」

ディオを慰める同世代の常套文句がそれだ。「処女はもてはやされるんだからさ、童貞だって恥ずかしいことじゃねえよ」「純潔って男にしる女にしる大事なものだと思うわ」「そうやって大事にしておいて、いつか好きな人にささげられるって素敵なことじゃないかな」

そんなもの詭弁に過ぎない、とディオはいつでも叫ぶ。

「誰も貰ったことのない槍と、誰も通したことの無い砦、どっちに価値がある？」

「……砦」

「つまりはそういうことだ」

「……………」
「ごめん」

謝られてもうれしくなかった。

むしろこの大胆不敵なイザドラが謝罪した事実が止めになった。

「……………」しかし、なんだ、君は私の目から見ればなかなか良い男だぞ」

フロローまで入った。

「顔立ちも悪くは無いし、鍛冶仕事で体はできているし、口も回るしさつき言っただみたいに気立てが良いし。それに、ほら、えっと、料理もできるじゃないか。うまいぞ、君の料理は」
「……………」お前が善意で言ってるんなら感謝するけどな」

そう言っつイザドラは多分、途中から言えば言うほどディオが惨めになるのが面白くなっているに違いない。なぜなら顔が晴れやかだからだ。

「地獄に落ちる愉快犯……………」強盗よりその罪は重いぞ畜生……………」

「何を言っ、友情にのっとりた気遣いだ」

なぜディオの周りにはこう面の皮の分厚い女しかいないのだろう

か。

神がいるとしたらその横っ面を張り倒してやりたいとディオは心底思った。

「まったく君は可愛い奴だ。好意的に思うぞ」

「絞めるぞ。キュツて」

「本当だって」

「……さっさと食え」

「それだから可愛いというのだ」

言うだけ言ったイザドラが再び食事に取り掛かって、程なく皿は空になった。ディオに見れば悪夢がようやくさめた心持ちだ。

そんなディオの心中を見抜いたわけでもないだろうが、イザドラが笑う。

「ようやっと、という顔をしているところ悪いが、最後に一つ話がある」

「なんだよ」

「要求、その四だ」

干し肉をつまんだ手をぬぐいながら、イザドラは続ける。

「これが本命だ。これさえかなえば、私は出て行く」

竜、走る

翌日。店を開けようと裏口を出たディオは肩を叩かれて振り返った。

「ん」

「せめて主語をつける」

「鶏だ」

「みりゃわかるよ」

つまりは捌け、ということだろうが。

ヴァレリーが持ってきた鶏を、ディオは肉屋でもないのに四苦八苦して潰すことになった。

「こんなのであれば肉屋の親父に殺されちまうよ」

昼時、思いがけず品の増えた昼食を前にしてディオは一人こちる。ペロリとヴァレリーは唇を舐め、返す。

「気にするな。詰め所の敷地内は王都扱いだ」

「王都で取れたんだから町ギルドの管轄外って？」

「少なくともアンズイはその気で作ってるな」

「肉が出身地自慢してくれるんなら安心して潰せるけどな……」

こつもおいしそうになつては見分けがつかないのだ。そして年がら年中家畜の買い付けに飛び回る肉屋は、商人の中でも段違いに腕が立つ。

詰め所の脇で「食べるものを作る」なんて大雑把な趣味を掲げるヴァレリーの同僚の顔を思い浮かべれば、「なはー、気にせず召し上がれー」と能天気な笑いかけられた。出来たものをこうして分けしてくれるのはいいのだが、時々こういう非常にダーティーな扱いになるものまで回ってきていけない冷や汗をかくこともある。とはいえ目下財政難のマツケンジ家での非常に重要な栄養源であることにも違いなく、断るに断れずにこうした関係がだらだらと続いている。

「困ったもんだけど、助かってもいる……」

「後半だけ伝えておこう、アイツもきつと喜ぶだろ」

「頼むよ」

少なくとも悪意の無い贈り物だ。返礼で幸せになってももらえればやはりうれしい。

「鶏肉の焼いたやつ、包んどくからそれも持って行ってやってくれ」
「これが」食卓の中央にすえられた鶏肉を切り分けながら、ヴァレリーが言う。「今度はどんな工夫をしたんだ？」

「塩コショウの前に蜂蜜を塗りこんでみた。これならコショウが少なくてもうまいって聞いてな」

「そう甘やかすからアンズイが調子に乗るんだ。知ってるか？ お前がこないだ香草焼きにしたせいで、詰め所はバジルとローズマリーに占拠されてるんだぞ」

「ああ、じゃあその場でつんで茶に出来るな」

「飽きるほどな。頭から芽が生えそうだ！」

「……そういや、キアズマにそうう話があるらしいな」

海を隔てた極東の島国のこっけい話だ。サクラという木の種を飲

み込んだせいで頭からサクラの木が生えて来た、とかいう。

「妹さんの土産話か？」

「おう、またそのうち帰ってくるってさ。先月通った旅劇団が手紙持ってた」

そういうとキアズマで武者になるというって妹が家を出た朝のことが、まるで昨日のように思い出される。スットコパープリン親父より少し前に家を出た妹のことを家族の誰もが心配しなかった。それ程腕が立つたし、何よりその意思の硬さを知っていたのだ。

それからも思い立ってはこちらに帰ってきて、極東の風物について話をしてくれる。前に帰ってきてから半年ほどたっているが、届いた手紙にはそろそろ家のベットが恋しいといったことが書いてあった。あと誤字脱字がいっぱいあった。

「親父の血をアイツが全部引き受けてくれたような気がして、俺は、もうアイツのために出来ることなら何でもしてやりたい……」

「はいはい兄妹愛兄妹愛」

「その愛をサイズにするとだな、こう、親父への尊敬がアリンコほどだとして……」

「おーおー愛憎劇愛憎劇」

「お前唐突にめんどくさくなってきてねエ？」

「お前のその話が何度目だと思ってるんだ」

「一日一度は表明しておきたいこの愛」

「前から思ってたんだけどお前って気持ち悪いな」

「甘んじて受けよう」

世に言うシスコンというのに自分が当てはまるらしいのはうすうす感じているが、だからといって治すつもりはさらさらない。

「俺の妹はなあ、唐竹をど真ん中から」

「ど真ん中から割ったみたいな性格？」

「んにゃ、割ってその勢いで手が地面にめり込んで、かつ抜き方がわからないままその場で一晩野宿して、朝になったら何で手が埋まったのか思いだせずには不思議がつて俺に超笑顔で報告しに来る、しかもその過程で地面から抜けてるのに気づいてない、そんな性格」

「……前より随分悪化してないか」

「ここ暫くですます素直ない子になりました」

「なあ、ホントに、本当に外国なんかに行かせて大丈夫なのか！？
外交問題とか起こしてないよな！？」

「うちの子に限ってそんなそんな」

「その無関心が家庭を駄目にするんだ！」

ひとしきり噛みあつたところで、いったんお互いが食事に戻る。租借する音を余り他人に聞かせたい人間ではないのと、どうしてもこの二人で会話していると大声を出してしまうので、ディオとヴァレリーが一緒に過ごす食事はこういった形になることが多い。ひとしきり鶏を堪能して、ディオが重ねた皿を持って立ち上がるまで、ヴァレリーは口を開かなかつた。

鍛冶家業だけあつて、マツケンシイ家は裏庭に相当深い井戸を引いている。そこまで桶に入れて洗いものを運ぶのに、いつもヴァレリーは布巾を持ってついでくる。釣瓶にかけたロープを手繰りながら、ディオから四方山話を持ちかけ、そうしてまた粗いもの間はバカ話だ。

いつものように話し出そうか、と、ディオは気軽苦切り出すことにする。

「さっきの話だけどさ」

「ん？」

「妹の、武者修行。実際そんなに心配してないんだよな」

「まあ、確かにあの子は私から見てもずば抜けて腕が立つしな」

「いやさ、それだけじゃなくて。キアズマだから」

大体ここからだと一月ほどの旅になるのだろうか。その多くは海上移動になるが、キアズマからここまでの海は基本的に穏やかで、航路も良く知られてしっかりしている。旅人が旅をする分にはまず心配はない。

「あれだけ遠いと戦争する気にもならないみたいだしな」

とディオが付け足す。

「そうだな……、国王陛下も今のところ、キアズマとは友好的な貿易を続けていくつもりらしい。わざわざ攻め入る動機も必要もないからな」

「戦争がないってのはいいことだよ……。武器屋としちゃア商売上がつたりなんだけどさ」

「お前は一品物のほうが得意だろ。戦争向けの大量発注なんて向いてないじゃないか」

「別に俺が直接打たなくても、仲介とかメンテナンスとか商機は転がって来るんだよ」

さすがに何万人と死ぬドンパチを望むわけじゃあないが、大きな盗賊集団の討伐戦線でも募集されないだろうかと、とはたまに考えってしまう。「これ、拭くぞ」「はいよ」と、大皿なんかをヴァレリーに手渡ししながら、ディオは考えてしまう。

武器屋とはなんだろうか。

命を食い物にする、そのこと自体には随分若い頃に折り合いをつけた。結局打つことと売ることしか出来ない以上、あとは売る相手をとことん見極めることしかできはしないのだ。もしも自分以外の人間が売るのよりも、より悲劇の少なくなる商いをする。自分にならできる、という気概を持って、あるいは使命感を持って武器を売る。そういうことでしか、父が殺しその父が殺し、それに連なる祖霊が殺しと積み上げた死屍累々に責任をおうことは出来ない。

ただそう言う奇麗事を置いておいて、自分の欲望を、つまり明日は今日よりいいメシを、という向上心を抱くことは、多くの場合「もっと殺そう」という発想に行き着く。

この思いが罪悪なのなら、自分は、ディオヘルは、この名で生まれて武器屋を継いで、そのせいで。

あらゆる向上を望んではならなくなったのか？

「ディオ、手」

「あ、ああ。悪い」

知らず知らずにとまっていた皿洗いをせっつかれて再開する。すっかり綺麗になった皿がつみあがるまでにそれ程時間はかからなかった。桶を抱えあげて、もう一度屋内へ。敷居をまたいだ途端に、また会話が始まる。

先に行くヴァレリーが言う。

「戦争、という話ならな。キアズマよりきな臭いところがある」

「どこだよ？」

「北方」

キシ、と桶の中で食器がこすれた。

「山脈向こうの土地はやせ細っていて、そのうえ山越えは春先でも死者がでる難業だ。国王に限らず、この国のものは誰もそこに攻め入ろうなんて思っちゃいない」

「知ってるよ。誰だって」

「そうだな。みんな、北方と戦争なんてないと思ってる。《こつちから攻めるつもりもないのに争いごとになるはずもない》、と」

「間違ってるないだろ」

「そんな傲慢が通るか」

廊下の真ん中で、ヴァレリーはふと立ち止まった。

「こつちに襲う理由がなくても、向こうには大いにある。私たちが村と呼んでいる規模の土地で、向こうの人間はその二倍食っている」

「だから襲ってこないんだろが。つまり、俺達は向こうの二倍飯を食ってるんだから」

それは国民の平均体格の差であり、そしてそれ以上に単純な継戦能力の差だ。山脈をはさんでの持久戦になったとき、こちらは相手よりはるかに殴り合いを続けられる。北方と王国での戦争は起こらない。戦争なんてレベルにならないというのが、ちよつとでも祖国の外交を知る大人たちの共通見解だ。

「だが」と、ヴァレリーは足した。「だが、もしも、北方民族が」

「牛を素手でくびり殺せる兵隊を、千人用意したとしたら」
「っ」

息を呑んだ。

ヴァレリーは振り向かない。仕事ではないこの時間、ヴァレリーがいつものように髪をまとめていない、それがやけにディオの目に付いた。音さえもなく、耳が澄んでいくかわりに、視覚が引き上げられていく、そう言う感覚。

ひりひりと空気が、冬の朝のように凍てついていく。どんよりとした曇りを思わせる。不吉な重さと、硬さ。

ディオの視線は行き場を失って、目の前のヴァレリーの後頭部へ吸い込まれていく。

ひきつけられ、ひきよせられ。その、後頭部を、

ベンディ印のお玉で一閃。

二十二の女が後頭部を抑えて綺麗にのけぞる姿をディオは初めて見たが別段うれしくもなかった。

「痛ッだ、イ、イツ、だあっ!？」

「アホかヴァレリー」

「どこから!? 今どこからお玉が!?!」

「洗い物していた桶の中から」

「そんな、仕込みを、態々ツ……………!」

「いや、ただの偶然だけど」

ご大層に拭くまでもないだろうと思つて適当に水を切つて放り込んでいたのだった。まさかこんな伏線になるとは自分でも思つてなかつた。

「やっぱりベンディおじさんとこのお玉は丈夫だ……………」

「一回その職人に会わせる! 未認可危険物販売でしょつ引いてやる!」

「ナニイウデスカ、モチロムラクバコウニンネ。アンゼンアンゼン」

「国家の安全が脅かされている!?!」

「別にちよつとさあ、その気になれば石ぐらい砕けるその程度だつて」

「そんなお玉がここいらの一般家庭に流布してのか!? 危険極まりない!」

「極まつてんのはお前の頭だつつの」

何物騒なこと言つてやがる、と言つと、ヴァレリーが振り返り、何か言いたそうな顔でディオをにらみつける。

「なんだよ」

「……………」

「あ、アホー」

「……………だつてえっ!」

「うお、やめるキモイ声出すな!」

特に言いたいことはなかった。というか、よっぽどお玉が利いたのか、随分昔の、憲兵になる前の口調と声色に戻っている。

憲兵になってからのヴァレリーにすっかりなれたディオには相当違和感が残って、「耳に引くかかる！ 首筋がぞわぞわする！ ヤバイキモイヤーめーるー！」

「うっさい！ キモイとか言うなアホって言ったほうがアホなんだアホーアホー！」

「例えそうだとしてもその論理はお前がアホでないことを証明していない！ よってお前は俺をアホと罵倒することによって自分がアホであることを証明したばかりか繰り返しアホということにより自分がアホであることをひけらかしているのだ！」

「何言ってるのか分かんないんだよアホー！」

「お前はアホの王様だっつってんだドーアホー！」

「ディオがなんか接頭語つけたあ！」

その後も いつの間にか桶もお玉も地面に置いて 大声の罵りあいが続いたのだが、そういうえば昨日もこんなことをやったんだつたとどちらからともなく気がついて、なにか無闇な徒労感に襲われてへたり込んだ。

「止めよう、なんか、どうせあれだ、一週間後はジェフリが結婚して真・アマリモンズになるんだ、俺ら」

「……どこで人生間違っただろう」

「あれじゃね、洒落で憲兵の採用試験受けた辺りじゃね」

「……洒落じゃない」

「ノリ？」

「ノリでもない」

「……お前言ったじゃん、あれ、酒の勢いで試験会場に突貫して、

そのまま合格したって」

「そんなの方便だバカ。バカ、バーカ」

ディオが覗き込もうとした顔を、ヴァレリーは伏せて隠した。

「察せ、バカ」

「……」

「だから私はお前が嫌いだ」

こうなるともう、ディオにもため息くらいしか、つけない。

「……知ってるよ」

「フン」

「アイツ、イザドラなら、大丈夫だよ。《昨日も何事もなかったし》、いくつか頼み事されたけど、さすがに出来ないことがあるっていったら、《キッチンと理解して》、今は体が鈍るからって、ランニングしてる」

「……上で寝てると思ってた」

「もうすっかりぴんぴんしてるよ」

さすが、と言っているのかどうか、少し迷いはしたのだが。とにかく行って来いというとのあの金髪のならず者は、意気揚々と、足取りも軽やかに走り出して行った。

その後姿を思い起こしながら、ディオは言う。

「あれなら、一週間もいらなくて、大丈夫。万事心配する必要はないから」

「……」

「お前が心配しなくても、俺が何とかする」

「……………それらしいことばかり言ってる。いつもおまえは、口だけなんだから」

「だな」

「武器屋も、いつになったら元に戻るんだ」

「さあな」

「ちやらんぼらんめ。だから私は」

「知ってるよ」

「フン」

「さつさと立て、店を空けっ放しにして、それでも商人が若旦那」
「生憎、憲兵の監視がないと店に立てない身分なんだ。残念だよ」

軽口を叩きながらディオは考えていた。

ヴァレリーについたいくつかの嘘と、それに重ねて、イザドラの「要求その四」

イザドラは要求のどれもこれも、あきらめるつもりは、ないよ
うだった。

竜、昂ぶる

どこをどう走ってきたのか、イザドラが帰ってきたのはすっかり日も傾いた夕飯時だった。【アンズイに食わせてやる】と例の鶏の蜂蜜焼きをもって、ヴァレリーは詰め所に帰っている。

(また)

(この女と二人きりかよ)

「帰ってこなければ良かったのに、という顔だな」

「わかってんなら帰ってくんな」

「そうもいかない。相棒を人質に取られちゃあな」

相棒、というのは例のクレイモアか。

あんな様になるまでほっておいてよく言う。という顔をディオがすると、イザドラは肩をすくめておどけた。「怖い顔をするなよ」

「そんなことより村中走り回って腹が減った。夕飯を出せ」

「いけしゃあしゃあにも程があんぞ!」

思わず怒鳴ってから、一歩下がってディオはイザドラを指差す。

「いつとくがお前なんてな、間合いの取り方を間違えなきゃ怖くともなんともねえんだよ。武器屋にやあな、憲兵を呼ぶための呼子が渡されてんだ。吹かれなくなきゃ態度で示せ。大体お前は」
「町中走ってきたが」

唐突にイザドラが言う。

「花屋の娘は可愛かったな」

「……は？」

「その隣には赤ん坊がいた。母親は若かったな。向かいには老夫婦、友人かな？ 年配のご婦人方がお茶会をしていたよ。お茶の話題に出ていた教会の神父もいい年、シスターも同じく、若者だってパン屋の前にいた男は華奢だったしその連れの女はもつと細かった。彼らの話も伺ったぞ。同年代の友人の名は全部網羅したんじゃないか。アレフ、ケイン、タップ、アークイにシャミーにキント、トム、ロビンにニコラ。コーフィル、ゼノラ、クリミラ、サムウィルとエレノア。ケビン、サトクリフ、ケッセル……」

同年代どころか一つ前後　ディオ達が兄のように慕った、あるいは弟のように慈しんだ者の名前まで、イザドラは指折り数え上げていく。

「シミス、アンズイ、ヘイリア、タニア、ジェフリ、ヴァレリー。

で、ディオヘル。　君の評判も、色々聞いたぞ」

「……おい」

「なあ、この街の人間は全員、そういう風に間合いが取れるのかい？」

そんなわけではない。

たった一瞬ディオの顔に走った引きつりを見て、イザドラは実に愉快そうにニタリと笑う。

「君は優しい男だなあ。可愛いよ、うん、可愛い」

「一日かけて人質探しか、陰湿だなこの蛇女……！」

「竜だ。残念ながら」

飄々とそういつて、イザドラが歩み寄る。

「怒るなよ、冗談だ。別にそんなことのために走り回ったわけじゃないさ。もし帰ってきて例の女憲兵がいたら切るつもりだ。札だつたが。バカ正直に一人で待っていてくれたんだ。誠意には答えるさ」
「信用できるかっ！」

「信じてくれよ、取引相手だろう？ それに、私だけ取引材料なし、というのも不安じゃないか。君に剣を握られ、この腕っ節も決定打にならず、あげくそっちには国家権力までついてるんだ」

確かにそういう見方をすれば、イザドラの行動はいかにも決定的な取引に望む商人の努力のように見える。実際、デイオ自身もこの取引はこちらが取った、と思っていたのだ。圧倒的優位に立てたと。

それが、イザドラの一言でひっくり返る。

もしも、もしも街の人間を人質にとられたのならば。

ならば、

「もしもお前が、やってみたならな やってみたら。憲兵なんて、首に金がかかるなんてもんじゃない。二度とこの世で生きていけないと思つな。この世の武器屋の、蔵に納まる刃の全てが、お前の敵だ」

職として刃を持つ兵でもなく、職として刃を売る武器屋でもなく。

刃に関わらない者の血をその取引に少しでも匂わせるなら、容赦せずに武器屋はその相手に牙を向く。

それは武器屋が商売を続けるための最後のモラルであり、決して柚子つてはならない矜持だ。

そこにイザドラが手を触れるなら。

「ギルドに布告を流すのか？」

ディオの言葉に臆するそぶりもなく、イザドラは笑う。

「人相書はこう書いてくれよ。大剣を持つ若い女。膂力尋常ならざる。金髪は短く、薄い碧眼。容姿端麗。非常に美しくたおやか
「見つけ次第、殺してよし。と締めていいなら」

「……おいおい、もっと駄目だししてくれよ。ゾクゾクするだろ？」
そんなにつれなくされたらさ、と、両肩を抱いておどけるイザドラ。
ラ。

ディオからは、夕日が逆光になって、目元が見えない。

「まったくぞつとしない話だね。武器屋ギルド！ 全国どこか国をまたいで早馬と駄伝をめぐらせて、あらゆる殺しの道具を統括、管理、監視する殺意と害意と悪意のギルド！ そんなギルドに狙われちゃまったく生きた心地がしないってもんだ！」

そこでイザドラは両手を解いて、あのクレイモアを振り回すとは思えない、優雅な、たおやかな動きで、ディオの顎に触れる。

「そこを紹介してほしいんだ」

ようやく見えた目元はまるで笑っていなかった。

「『要求その4』だ。一日たったが、考えてくれたかな？ 可愛い可愛いディオヘル君？」

要求その4。

武器屋ギルドの連絡網をよこせ。と、そう言われて。

ディオはただ、首を横に振った。

昨日と同じように。

「ディオ」

「武器屋ギルドは武器屋以外に加担しない」

「ディオヘル！」

「武器屋ギルドは武器屋以外に加担しない」

「よこせて」

イザドラの顔から余裕が消える。

「言ってるんだろおがよお！」

顎を指でつままれる。

ミシリ、と嫌な音がした。

「力で手に入らないものがあることくらい、この年になればわかっているさ。にしてもな、ここまで強情なのは初めてだ！ なに格好つけてんだこの根暗童貞刃物狂い！ わかっているのか！ 今私がち

よっとその気になれば！ 君は下顎とこの場でお別れだ！ 一生水と粥で暮らしたいのかディオヘル・マツケンジィ！」

ぐ、ぐぐぐ、とディオの顎が持ち上がっていく。気がつけば夕日もすっかり傾いて、最早店の中には光はなかった。

いや、それ以前に店の外にさえ明かりがない。日が沈んでから、月が昇るまでのわずかな間、家々が明かりをともし始めるほんのわずかな間。町中が闇に包まれる。

抜け落ちたように世界が黒くなって。

「武器屋ギルドは武器屋以外に加担しない」

かくん。

想像した音よりはるかに軽く、ディオの顎はイザドラの手から離れた。

無事なまま。

「女にここまで迫られて、よくまあそんなに冷たく出来るな。君は」

「財産目当ての関係なんてごめんだね」

実際のところ、イザドラはもうディオに手が出せない。

今までの要求ならば、最悪ディオをひり潰して、仕事場から自分のクレイモアを持って逃げ出してしまっても満たせているのだ。もちろんクレイモアは修理されないうままだし、盟友を殺された武器屋ギルドの報復も怖いけど、こと武力にかけてはイザドラに対抗できるものは早々ない。高々田舎の武器屋の若旦那が一人死んだところで、ギルドが総力を挙げて殺しにかかるものかどうかは怪しいものだ。損得の勘定が決定的に合わないのだから。

しかし、『要求その4』に限ればそうは行かない。

イザドラが武器屋の連絡網 情報網をつかって何がしたいのかわかりはしないが、ここでディオを殺してしまえば決してその目的は達せられなくなる。こういうギルド間の連絡方法は単純に連絡先を知っているだけでは成り立たないのが普通だし、なにより、ディオの死体が店先に転がれば間違いなくその姿を見たヴァレリーから全国の武器屋ギルドに連絡がいきわたり、イザドラはこの世にある全ての武器屋に立ち寄れなくなる。駅伝式で次々乗り換えられる早馬よりすばやく移動できるのなら話は別だが、いくらイザドラの筋力でもそれは不可能というものだった。

だから、イザドラにはいまやアドバンテージはない。

人質を 冗談めかしていたとはいえ ちらつかせたその行動は確かにディオをぎよつとさせたが、ディオはそれに『武器屋ギルドの総意』で答えた。こうなれば『人質をとろうとした事実』さえイザドラにとっては弱みになるのだ。激昂して凄んでみせたのは、演技半分、本気半分だったろう、とディオはにらんでいる。

そして演技のさらに半分は本気なのだ。

暴力は理屈を飛び越える、もしも力以外で思い通りにならないのなら、力で思い通りにすることもありえる。あるいは、余り言うことを聞かないとコントロールを失うぞ、と、イザドラは示したのだ。だから演技のうちの半分は、本気でやってやるぞ、という、演技だったはず。

ディオがそれに対してあくまで冷静に答え、『その演技はわかっている』と示したことで、ようやくあの場は完成した。

ひりつくような虚虚実実の駆け引きが、終了したのだった。

「二度とやりたくねえ」

と、夕食を所望したイザドラに甲斐甲斐しく給仕しながら、ディオは一人愚痴る。

「なんだよあの腹の探り合いっつか面倒臭いし辛気臭いし緊張するし消耗するしいいことなしじゃねえかクソツなにがどーしてこうなつたってんだ何にも俺は悪いことしてないぞきっちり食い扶持稼いで恥ずかしい真似もしてない妹を常々気にかける素敵おにいちゃんを地で言ってるのに右見ても左見てもトラブルばかりじゃねえかそもそもケチのつけ始めはあの親父だよあの親父の子供に生まれたことだよマジわけわかんねえあの不良中年帰ってきたら埋める生めて蹴って水浴びせてしんなりしてきたら店の裏側に干してやる考えただけで腹が立つ腹立てたらなお疲れるあー疲れたもうやだよだしんどのいやだ！」

「あ、この鶏おいしい」

「わかる？」

「……頬に手を当てて小首を傾げるとか男がしないでくれるか」

殺意が沸く。と言う口調が冗談っぽくなかったので、デイオは即刻ポーズを変える。お玉を右に、左手を腰に。

「残しちゃだめだZO」

「苛めすぎたか……」

心底後悔した、哀れみ深い目をされると、なかなか答えるものがあつた。

「ホントになあ……」イザドラが食事をぱくつきながら言う。「なんだか、万事がイメージと違う」

「あん？」

「もつとこう、忌み嫌われながら、得るものを得て高飛びするつもりだったんだ」

それがだ。「何だこの生ぬるい空気は　なあ、私は強盗だぞ」

つくつくと鶏に取り掛かりながら、イザドラはため息をついた。

わからない、理解に外れる。と小さな声で繰り返す。

「ため息をついているのが、不思議なんだ。こんなにのんびりと考え事をしているのが。非常事態のはずなんだ。これは。いつ憲兵がくるかわからない店で、私の目的も本性も知っている人間がいて、しかもそれが、私のうでつぶしで　私の唯一の財産でなんともならない相手なんだ。なのになんでこんなに落ち着いていられる」

「俺からあふれるジェントルなオーラが」

「え？」

素で不思議そうな目を向けられた。

「……………」

「あ、うん、冗談だったのか。ああ、ああ、なるほどそういう意味か面白いなハハ」

「…………ソウダヨ」

「ハハハ、愉快的な奴め。ごちそうさま」

笑いながら立ち上がったイザドラは、いつものとおりに大胆不敵で。

だが。

なんとなく、ぐらついているようにディオには見えた。

から。

「イザドラ」

「なんだ？」

「まだ、何も盗ってないだろ、お前は」

命も返してもらったし、と嘯く。

「だから、行き倒れの旅人で、いいじゃねえか」

イザドラのほうは見ないまま、ディオは食卓の上を片付ける。

「…………目一杯食いやがって、救民法適用されねえとがつつり破産だつーの。お前が旅人じゃないと申請通んねえんだからよ、そういうことにしとけ」

「　　フン」

イザドラの表情はディオには見えなかったが。

「ほめられたとたんに評価が甘くなってるないか」

「まあそういう可能性もぬぐいきれない」

「案外簡単な人間だね、君」

「違う、ただの愉快犯だ」

「意味がわからないよ」

まったく。「可愛いな、君は」

「勝手に言ってる」

と、ディオは毒づいたつもりなのに、小さな声しか出なかった。

チクシヨウ。

これじゃ照れてるみたいじゃないか。

竜、誘う

「さて」

と食卓の上をペるりと片付けて、イザドラは口元をナプキンで拭く。

「で、晩酌のつまみはなに？」

「あれ、ちよつと待って耳がおかしい聞こえない。ごめんね、もう一回」

「お酒が飲みたい」

「なんだよコイツマジ死ねよ！」

喚き散らしながらディオは頭を抱える。

70

「なんだもつ。君はよく錯乱するな。落ち着け落ち着け深呼吸」

「錯乱もするわ！ 何様だ！ お前は王様か！」

「とりあえずお玉とエプロンと片づけ中の食器を持った君は宿屋の女将の風情だ」

「亭主閉白の強盗つてのも見たことないぜ！」

「落ち着け落ち着け、ほら、吸ってー」

「……………スウー」

「で、つまみは？」

「吐かせろ！」

なにが致命的って、こういつやり取りがちよつと楽しくなってる
辺りだと思つ。

思えば妹が出て行って以来、誰かと食卓を囲むといえはヴァレリーとの軽い昼食休みだけになっていた。友人と外に食べに行くことはあっても、こんな風に夕飯を親しげに（それも自分の作ったものをいかにもうまそうに）食べることなんて、ずいぶんと久しぶりだ。

知らないうちに人恋しさが積もっていただろうか。

悔しくなって眉をひそめる。

「面白い顔してないで！ アルコール！ アルコール！」

「お前ちよっとは感慨にふけらせるよ」

唐突に要求の仕方が幼児臭くなってるし。

いろいろと台無しだった。

「ここは客に酒の一献も出さんのか！ 女将を呼べ！」
「いたら怖えわ」

いるとしたら今の自分だ。

「本音は？」

「欲しい」できれば美人で胸がでかくて戯れに裸エプロンとかしてくれる「個人的な女将が欲しい」

「ディオ……」ふ、と悲しげに笑ってイザドラが言った。「そろそろ大人になれよ？」

「だって！ だって！」

「いいか、君の思ってるような女性なんてどこにもいないんだ。君

は女性の皮をかぶった幻想を見ているんだ」

「イヤだ！ 聞きたくない！」

「女は三人集まるとかく誰かの悪口を言うぞ？」

「嘘だ！ お花とかニヤンコの話をしてるってばっちゃんが言った
！」

「そして一人が抜けると、今度はその女の悪口を言うんだ」

「それはホントに聞きたくなかった」

イザドラの顔の影が濃くなってるのも信憑性を高めてて嫌だ。

昔何かあつたんだろうか。

「うわー……。なんかホントに飲みたくなってきたじゃん。止める
よなー……」

「いいじゃないか、ほらほら、なんならつまみはなくてもいいから。
なにかガツと来るのを飲ませてくれよ。火酒とかがいいな」

「ねえ」

あつかましい面にきっぱりと言い放つ。

「なんだよ、王都名物だろう。近場なんだから流通してるはずだ」

「ありません」

「じゃあ他のもいい。強い」

「「ございません」

「……ワインとか？」

「申し訳ありません」

「なんでじゃー！」

テーブルをひっくり返そうとしたところを骨をつかって押さえ込
む。イザドラの強力をテーブルと背骨を通じて地面におしつける。

「家庭内暴力良くない！」

「家庭を守る甲斐性がないからそうなるんだ！ 酒買ってこーい！」
「もうウチにはそんなお金ないって言ってるでしょ！」

「ないなら体でも売って稼げ！ オレア知ってんだぞ憲兵の若けえのと何してんのかなあ！」

「そ、そんなこと！」

「へっへ、どこを触ってもらってるんだあ？ どう開発されたのかみてやるうじゃねえか」

「い、いや、やめてあなた！」

とかなんとか。

なにやってるんだ、と思わなくもない。

「へへへ、いい二の腕してんじゃねえか兄ちゃん」

「暴力亭主から街のチンピラへの華麗なる転身！」

くるりとこちらに回りこんだイザドラに二の腕をさすられる。

「いやあ、しかしなかなかいいな。そんなに太くないのにむちむちして」

「お前のツボがわからない」

そして微妙に恥ずかしい。

「こんな腕でインゴットを振り回したりできるのか……？ いや、例の骨とかいうやつか。にしても細いな。街でたむろする若い衆と違った感じだ」

「なんだそれ」

「いや、酒場にこう」

「酒の話にするつもりだな！」

揉みまわされていた腕を振り解く。「ああ！」「名残惜しそうな声出すんじゃないねえ！」

「だってなあ、いいもんだぞ、人肌」

「したり顔で言うな！」

「君のはなんていうのか、働いている割にやさしい肌触りだ。もっと鍛冶場焼けしてると思ってたぞ」

「そんなテイステイングが出来るような経験が！？」

「戦場にいれば素手の取っ組み合いも増える」

独壇場だ。とイザドラはにやりと笑う。

「鎧ごと引きちぎれるぞ」

「二度とお前に触らせない！」

「そういうな、代わりに好きなところを触らせてやるっじゃないか」

「す、好きなところっ　　！」

思わずごくりと唾を飲む。

「そ、それは本当に」

「好きなところだ」

「ふくらはぎでさえもか！」

「……」

「えーって顔すんなよいいじゃん」の腕よりましじゃん！

「君の業の深さを見た感じだ」

ふうっとため息をつかれる。

「ま、ふくらはぎを触るのならついでにつま先も舐めてもらおうか」

「どういうセットメニューだそれ！」

「一回三十秒一日五セットでみるみる奴隷根性が身につくぞ！」

「俺の尊厳がシェイプアップされる！」

「ビクトリー！」

異次元の電波を受信したイザドラが拳を突き上げ、ついでにデオの顎も打ち抜いた。

もちろんぶっ倒れるデオ。

「あ、ごめんごめん」

「ごめんごめんじゃねえ！ お前自分の腕力わかって使え！」

「良い音したなあ。あはは」

「こっちは空が割れたかと思ったけどな！」

実際、剣闘士みたいにとっさに後ろにぶっ倒れなかったら顎が割れていたかもしれない、そういう音だった。

というか、何が起きたか半分理解して避けたデオでも、死んだかもしれない、と少し思ったのだ。

キャンキャンと怒鳴りながらも、なるほどな、と思う。

これなら鎧だって引きちぎれるだろうし、戦場暮らしだって好き放題だ。

想像する。ちと土ぼこりの匂いのする戦場。怒号と剣戟の音。振り回されるクレイモアは人を引きちぎる。

イザドラは笑っている。鎧の中で筋肉を律動させ、飛び掛り、

なぎ払い、時に剣を放り出してつかみ掛かる。握る、潰す。千切つて捨てる。

力が全てまがまがしいとはいわない。ディオは元は同じ刃でが家庭を守る器具にも殺めの代物にも変わりえることを知っている。全てはそれで何をなされるかなのだということ。

そしてイザドラは、イザドラの体は、武器なのだ。

自分が商う。命を奪う。人をゴミくずにして尊厳を引き摺り下ろす、武器なのだ。

そう使われているのだ、と、思う。

「どうした」

「いや、なんでも」

「ぼつとされると心配だな。打った場所が場所だ」

「大丈夫だよ。覗き込むな」

すこしゾツとしてしまうから。

気まずい思いをディオは抱える。

「……なあ、イザドラ」

「なんだ？」

「殺すって言うのは」

覗きこんでくるイザドラから、目をそらすようにして言う。

「生きるために殺すって言うのはな」

「ディオ」

「……………」

「殺すというのは、生きるということだ」

「ああ」

「相手を殺すということは、私が生きるということだ。そういうことだよ、ディオ」

「ああ、そうだな」

わかっている。

『大きい』ということを考えるためには『小さい』が必要のように、『熱い』『寒い』『近い』『遠い』『多い』『少ない』

すべては裏表だ。

表しかない硬貨は作れない。

そして硬貨の裏表のように、最も近く、決して交わらない。

『美しい』だけの世界はない。

「生きるために殺すんじゃない。生きて、殺して、生きるんだ。そこに優劣はない」

その言葉をどちらがいったのか、ディオにはわからなかった。

ため、ではなく。

ただ、そうあるのだ。

そうあるだけだ。

「本当に、呑みたくなるな」

「いいじゃないか。ささ、どこかにあるんだろ。秘蔵の一本、出してくれよ」

「ホントにねえんだよ」

ガリガリとディオは頭をかく。

「一人暮らしで朝がはええんだよ。呑みすぎて寝坊したら大事なんだ」

「あの憲兵が毎朝来るんだろ？」

「ふらつときて入れるような戸締りじゃねえよ。詰め所の倉庫より刃物があるんだぞ」

「だからこそなにか方法があるだろ。役所に合鍵でも預けてないのか」

「それを使うつてのは書類が五、六枚必要で、その上憲兵が総出で来るんだよ」

その上ディオは一度飲んだらなかなか目の覚めない性質だ。呑むのはよつぽどで、次の日は休みにすると決め込んでヴァレリーにもそついい含めてからと決まっている。

「ふうん、そんなものか。だが安心しろ。私は日の光が射すと必ず目を覚ます体質だ」

「うさんくせえ」

「むしろ特技だな。職業病と言っても良い。戦場というのはそついうところだ」

なんせ便所も風呂もないのに、酒だけはどこからか集まってくるんだからな。とイザドラはいい、ディオの肩に手を回す。

「な、だから心配いらないうて。私がいる限りどんなつぶれ方をしても日の出と一緒に起こしてやる。な」

「なあもつくつくくなよ！ さつきからやたらベタベタしてくんのは何でだ！ いったらお前にはもう触らせたくねえ！」

「そういつて二度触らせる人間というのも私からすれば新次元ななさ」

「居直り強盗が親しげになるな！」

「違うな、行き倒れの旅人だ」

にや、とイザドラが笑う。「な、いいだろ。君だつてたまには思いつきり呑めばいい。ちゃんと起こしてやるし明日の仕事を手伝つてもやるから」

「……ひよつとして寝込んでるうちに家捜しでもするんじゃないだろうな」

教えてもらえないからって、自分で探すつもりか、とディオは訝る。

連絡網が何らかの書面にまとめてあると踏んで、ディオを潰して見つけ出す腹積もりか。

「そつちも、まあ、諦めたわけじゃないが」

「おい」

「どつちみち君の意に沿わないやり方はもうしないさ。布告を流されちゃ意味がないし、武器屋同士で紹介しないと連絡網なんてろくな役に立たないだろう」

「……わかつてんなら、なんなんだよ」

「私に向かつておとなしくしてるといった、可愛くて面白い男と一献交わしてみたいのさ」

そういつてイザドラはさらに笑つ。

にや、からにたあ、と深まった笑みには、やはりろくなものを感じないが。

どこことなく、悪いものは感じられなかった。

「だけどダメだな、ないもんは呑めねエよ。ウチには酒は一滴もない」

「目の前に”売るほど”あるじゃないか」

「なにいつて」

と、言ったところで、窓から怒鳴り声が割り込んだ。

ガラスの割れる音、叫び声。

「な、景気もいいみたいだしお邪魔しよう」

にたにたあ、と笑うイザドラと、どうせまた喧嘩だろう、向かいの酒場の喧騒に、ディオは心底顔を歪めた。

竜、演じる

動かすたび断末魔をあげる木戸、丸テーブルとカウンター。棚にならんだ安酒と見渡す限りの飲んだくれ、ろくでなし、少しの正気者（それはつまり警戒を怠らない凄腕の荒くれ連中だ）

あとは戦記物を歌う吟遊詩人さえいれば、絵にかいたような酒場の出来上がりだが、ここにはそれはいなかった。ーおとなしく歌を聞く奴なんていないことと、酒以外に金なんて払うつもりが無い奴ばかりなことが、その理由だ。

そんな酒場というのはつまり、この世の果てということだ。そういうふうにはディオは思っている。

そしてディオの家の前のこの酒場は、世界の果てでも一等のどん詰まりだ。

ディオが扉を潜ったことに気づいたものは酒場のなかでも五人といなかったろう。扉にくくってあるはずの真鍮の鐘は喧嘩のたびにぶつ壊されて十二個目を数えたところでマスターはディオに修理を頼まなくなった。十二個壊れるのに一週間かからなかったのだから

あたりまえだろう。いまではひしゃげてつぶれて元の形のわからない金属が木戸のすみにぶら下がっている。真鍮の輝きだけがそのままなのをみて、ディオは酒場に来るたびにうんざりする。

いらっしやい、とマスターが呟いた言葉も、ディオの元には蚊の鳴き声のようにしか届かない。

そんな酒場でもイザドラが入ってくれば、わずかばかりざわめき

が収まった。

ディオの隣を通りすぎたイザドラは迷いの無い歩調でその長い足を進め荒くれどもものド真ん中をつきっていく。ちょうど十歩の間、金色の短い髪を揺らして、カウンターへ向かう。

ガツ、と。

ひときわ大きな音をたてて、椅子に体を投げ出して、イザドラは大仰に足を組んだ。

「酒」

と、一言。

糞度胸め、とディオは毒づいた。

「嬢ちゃん」イザドラの声に壮年のマスターが、持っていたグラスを静かにおいて答える。「注文するならきちんと頼みな」

「ん、ああ、すまないなマスター。なにかガツと来る酒を頼むよ。

あとは酢漬けをいくつか」

「キツイのは高いよ」

「かまわないよ、適当に頼む」

「待て待て待て」

ディオもカウンターに進む。

「勝手に頼むな俺の財布だぞ。マスター、一番左のでいいよ」

「おいディオ、それは一番安いのだろう。男が酒場でケチケチするな」

「居候は黙ってやがれ。俺の食卓をこれ以上貧相にされてたまるか」
「坊の連れか」

と、マスターが酢漬けを並べながら言う。

「またべっぴんを連れ込んだもんだな。役人のお嬢はいいのかい」
「マスター、べっぴんって言うのは二人前食う女には使わねえよ」

ちげえねえ、と笑うマスターに、なにか言おうとしたイザドラが毒気を抜かれたように口をつぐむ。

そのままマスターは棚の中ほどの酒を二人の前においた。

「マスター」

「だけどよ坊、二人前の嬢ちゃんの言うのも確かだぜ」

この国の酒場では、棚の左から順に酒の値段が並んでいるのが普通だ。

ガラスの瓶にーこれだけでずいぶんいい酒なのがあるー入った酒をおいて、マスターが言う。

「ずいぶん丈夫な金物を商ってるらしいじゃねえか」

「ベンディおじさんの品のことかな」

「それよ。今度よ、その職人にドアベルを頼んでくれよ」

マスターがちら、と入り口に視線を向ける。

「肉屋の石頭をどついてもへこまなかつたらしいじゃねえか、それ

ならアホタレども相手でもちったあ持つだろ」

あとはもちつとマメに来て、良いもん食ってけ。とそれだけいうと、マスターはカウンターの端へ歩いて、グラスを磨き始める。

へ、と笑って。「ったくよ、マスターにやかなわねえな」

なあ、と横を見るとイザドラはとっくに飲み始めていた。

「おーいしー」

「お前さあー！」

「デイオいいねこれ、このキャベツのやついいね」

「ちよつとは待てよ！ んで感じ入れよ！ 今まさに俺とマスターのハートフルな全く新しい！」

「そーいうの私興味ないし」

しれつと言いつつ酔漬けをパクつき始めるイザドラの横顔をげんなりとみつめる。もちろん気にするたまではなく、あつというまに「いい」らしいキャベツの酔漬けは小鉢からなくなってしまうていた。

「マスター、おかわり」

「いいかげんにしろ」

結局出てくる小鉢を、今度はとられないように気を付けながら手元に引き寄せる。

(しかし)

そうしながら、イザドラの横顔を盗み見る。

(べっぴん、ね)

考える。

マスターの言う通りこうしてみると、確かにイザドラは美人の部類にはいる。あれだけのことをされて、今も苛立ち混じりにみているのにそう思うのだから、実際中々のものなんだろう。(金髪がこの辺りだと珍しいのもあると思う)

一応こういう酒場だ、女の身で来て厄介事にならないように、デイオが手入れしてあった鎧を着てくるように言ってあったが、正直あまり意味はなかったかも知れなかった。

むしろ普通の美人が来るよりも、女だてらに板金鎧なんて着てきたせいで悪目立ちしている様な気がしてくるのだった。

「はいデイオ、あーん」

「なんでそうなる!？」

「こつち見てるから食べたいのかなー、と」

「だからなんでその察し方でそうなるんだよ！ 普通に「食べる?」でいいじゃん！

「いいからちよつとくらい合わせる」「イザドラが声を潜める。」「こつちここで飲むんなら少しは芝居がいるだろう」

すかさずはいあーん、と差し出されたキャベツに戸惑うと、口に無理矢理突っ込まれた。

「えふっ!?! おうふっ!?!」

「もうダーリン恥ずかしがらずにー」

「誰がダーリンか！」

「はい、ぎゃばーん」

「どんな顔すればいいんだ……」

「いいつつも、今度は自分から（キャベツ突っ込まれなくなさに）口にいれる。」

「そうそう、美人には悪い虫がたかるんだ。そうやって見せつけてせいぜい虫除け頑張ってくれ」

「飯時に虫とかたかるとかいうなよな……」

「お、美人は否定しないんだな」

「俺の爺さん曰く、偽貨ほど表は美しく繕われる」

「よって婆さんに騙された、と言っってはぶん殴られるまでがワンセツトの金言だった。」

「そうして見た目ばかりマシに生まれたパープリンが、ディオの母を見事に騙して引っ掻けた結果ディオはいるのだが。」

「真理だねえ、あとは実践が伴ってればこんな厄介事を抱え込まなくてもよかったのに。お祖父様が草葉の陰で泣いてるぞ」

「だから悪人は一度ドブに落として使うとも言ってたな。溝鼠みたいなのが強盗だと思うかよ。ずだ袋しまい忘れたのかと思ったよ最初見たときは」

「ま、取り入れるようにいくらかは芝居をした」

「やっぱりか」

「行き倒れて迷い込んだ、というには、イザドラの脅しや要求は計画的だった。」

「考えりゃ行き倒れが鑑戸閉めるわけもねえか。くっそ、どっから

どこまで計算ずくだったんだ」

「徹頭徹尾だったんだがな、あれだ、きみの首ったま握ったあたりから計画が狂った」

「……悪人がいる」

「そのあまりのうなじの手触りのよさに
「嘘つきがいる！」

はは、とイザドラが笑う。

珍しく朗らかだ。

「良い酒場だな。少し騒がしいが、料理がうまい」

「呑む相手が良いのさ」

「そういうのはな、そういう台詞を素面でも言える男の台詞だ」

昼日中に練習でもするんだな、と言われる。

「せっかく目の前にあるんだ、たまには店を休んで遊べば良い。そ
ういう洒落っ気がないから女っ気までないんだ」

「ほっとけ、店に来づれえんだよ」

「ほら」とイザドラがディオのグラスに酒を注ぐ。「で、なんでだ。
店主に気に入られて来づらい店があるか」

「なめられてるからな」

「よう金物屋あ！」

甲高い声がした。

「おいおい上玉じゃんやべー似合わねー。金髪つつつたら高つけえ
んだぞいくら溜め込んでたんだおめえよお。タライ売った金で買え
んのー？」 鋼鉄女にへこへこしてシコシコ稼いでんだなごっ苦勞

「おー」

ディオとイザドラの間に無作法に体をねじ込んだ男が言う。針金のような体に赤ら顔を乗せていて、髪を油で整えてるのか妙な光沢をしているが、酔っていくうちに崩れたのだから、ボサボサのそれは驚くほどみっともなかった。

よいどれのなかに石を投げたら、こいつじゃなくてもどうせ似たようなのに当たるだろう、というような、立派な立派な酔っぱらいだ。

「……おい、虫除け」

「なめられてるからな」

「そういうことが、金物屋、ね。まああの店構えならそうもなるか」

「あーんは楽しかったよ」

「そうか、それを辞世の句にするといい」

「おーい、おいおいおい」

酔っ払いが二人の会話をさえぎる。そのままディオに顔を近づけ、酒臭い気を吹きかけてきた。

勘弁してほしい。

「おーい、なに無視してくれちゃってんのよー。何調子乗ってんの金物屋あー。やるー？ やっっちゃうー？ おまえあの憲兵もいないのにフカしてんじゃねエよマジで」

「無視されてるのがわかるなんてな」

イザドラが言うと、酔っ払いはディオから顔をそらす。意外だっ

た、とでも言わんようなイザドラの皮肉な笑みがどう見えたのか、いやらしくにたあ、と相好を崩した。

どうせこの男の耳にはまともに言葉が届いてないんだろう、とディオはおもふ。わかりやすく足元がふらついていて、白目はどろんと濁っていた。瞳に光もなく、肌は土気色にも近くなっている(きつと”左側”の安くて酷い酒ばっかり飲んでいるのだ)その癖にぎらぎらと汚い何か体がらにじんでいるようだった。

「うつく」

と軽くえづいて、酔っ払いがカウンターに身を預ける。

丁度ディオからイザドラの姿を隠すようになった酔っ払いは、ディオに背を向けたまま、喋る。

「おー、べっぴんだ。美人じゃねエか」

「どうも」

「へへ、なあ、おい、”美人さん”よお」

と、何かを含んだような声で酔っ払いが言う。

「ええ、”美人さん”。わかるー？ わかってるー？ こつうところにあ、女が一人で来るってのは、どういふことかなあ？」

「連れはいるんだが」

「一人前の男のことをよお、連れてって言うんだよお。なあ」

酔っ払いの背中が軽く揺れるのを見て、笑っている、とディオは思う。

「なあ、”美人さん”よお、俺達どつかであったことあるんじゃない

えのお」

「黴の生えたような口説き方だな」

「口説いてんじゃねエよ、なあ、こんなところに一人で来るんだからよお、そついう』お仕事』もしてくれたりするんじゃねえのお？」

げふっ、と下品な音をはさんでから、酔っ払いが続ける。

「幾らよ？」

今迄で一番に下卑た声で言う。

「なあ、コイツの倍出すからよ、俺の部屋こいよ」

ディオからは酔っ払いの背中しか見えない。

「なあ、”美人さん”よお」

なにかを含んだような酔っ払いの言葉と、背中に隠れて。

「そつだな」

「いいぞ」

イザドラの顔が見えない。

竜、罵る

しばらくディオはイザドラが何を言ったかわからなかったが、酔っ払いのほうはすぐにでもその意味がわかったらしい。にたあ、といやらしい笑みを深めたのが、見えないディオでも気配でわかった。

「で、幾ら」

「まずは豪邸だな」

す、とイザドラが綺麗に足を組む。

「この酒場の五倍はほしい。勿論平屋じゃなく二階建てで、玄関はびっしり彫刻の入った象牙で飾る。入ると大きな五段重ねのシャンデリアと、六十人のメイドの出迎えだ。メイドの数はそれだけじゃないぞ？ それらは出迎え専門のメイドだ、それ以外にもたっぷりいるな。私の着替えを手伝うのに十人は用意するんだ。衣裳部屋の中は十人がかりで着るような豪華な服ばかりになるのだからな。ギャリソンも同じ数だけほしいが我慢しよう、十分の一で良い。地下には酒蔵があって、私のためだけの酒場がある。酒は皆ガラスの瓶に入っていて、それ一本で屋敷を買い取れるような値段のものだ。パーティーはどうしようかな。毎日というのも豪気だが気疲れしそうだ、二日おきにしよう。各国の王族を呼べよ。戦争してようが政争してようがやってきて私の足に口付けをさせる。然る後」

足を組み、グラスを片手に、イザドラが男を見下す。

「君にはその屋敷の外で物乞いをする権利をあげよう。よかったな」

「やめてやってくれ可哀想だ」

おもわず口を挟んでしまった。

酔っ払いの背中で酔っ払いの顔が見えない。見えてても正視できなと思う。

繰り返すが。

やめてやってくれ。

可哀想だ。

「別にこの男に直接悪口言ってるわけじゃないぞダーリン」

「今のな、お前の目はな、明日死ぬ死刑囚の頭を踏んで来週の予定を話すような目だったよ」

言葉の内容に罪はないのに、神経を逆なでどころか鑢にかけるような苛立ちと敗北感を覚える。

「あとな、ダーリンじゃねえ」

「おいおい、ちゃんと芝居をしろよな。これだから童貞は」

「おい、なあ、聞いたか。今の人の心を的確に抉って塩塗って唾を吐くような悪口聞いたか！」

なみだ目の言葉を酔っ払いに問いかける。

というか、酔っ払いはディオの倍出すと言っていたはずで、つまりディオが仮に（ぞっとする仮定で）（現状ありえないことで）（想像するだに恐ろしいが）イザドラに手を出すとすると今言った内

容の半分を払わされて、その上物乞いにされるといふことだ。(や
っぱりぞつとする)

多分コイツは本気だ。

絶対コイツのダーリンにだけはならない。

「止めとけ」

びるびるびる、と震える酔っ払いの肩に手をかける。

ディオは心底から親切心をこめながらいった。

「この女は止めとけ」

わかってくれると良いな。

そして道を誤らずに、もうイザドラに変にかまって傷つくこと
がないと良いな、と、ディオは真剣に思ったのだが。

「ぎげんなよ！」

と叫んだ酔っ払いに手を振り払われた時、ああ、そうなるよね、
とも真剣に思った。

そりゃそうだ。

自分でもそうなる。

「このッ、このスベタあ………」

下から順に酔っ払いの顔が真っ赤になっていく。

「北の売女がよ、てめえ、それに、金物屋がッ……俺を、俺をコケにッ……クソ、クソアマ、クソがッ……」

「ディオ、私はキれたときでも君のように口の回る男が良いな。コイツは怒らせても楽しくないぞ」

「やめろ、今彼は人生をかけた屈辱の中にいるんだ。女に袖にされたことのない奴が口を出すなマジで。いやマジで。俺は一発殴られても文句ない。こんな劇薬なみに触れると危険な女を酒場に連れてきて監督しきれなかった俺の罪は重い」

「おお、見たかね君」イザドラが酔っ払いに言う。「私の連れは一人前だ」

「責任感だけはな」

「だったらあの晩の責任とってよダーリン！」

「どの晩に俺が何をしたのか考えてきたら法廷で争ってやるからかかって来い」

「……………あああああ……！」

なんかもう、酔っ払いの顔はトマトのようになっていた。

良い具合に熟れたそのように真っ赤っかで、はちきれそうだ。

多分もう、あんまりにも色々昂ぶりすぎて、自分でも吐き出しどころがわからないだろう。

そんな様子を見て、ディオが思わずにも呟いてしまったのが、はじけるきっかけだったのだ。

「……かわいいそう」

と。

「だああああああああれがああああああああああ
！」

叫んだ酔っ払いの気持ちは大変わかる。

凄くわかる。

ディオは責任を感じているし、一発殴られても良い。

「でもやっぱり痛いのだな」

酔っ払いがグルンと回って吹き飛んで、テーブルを三つなぎ倒して着地した。

シン、と酒場の空気が静まる。

十秒ほどして、イザドラが口をひらいた。

「……なあ」

「なんだよ、あきれた顔して」

「自分でやるんならそういつてくれないか。軽うくやっちゃったじやないか」

「……俺もこんなになるとは思ってなかった」

酔っ払いが叫んだときにイザドラは軽く「トンッ」と（あくまで

イザドラにとって軽く、突き飛ばそうとしていた。

一方ディオは骨をつかって、足払いをかけて酔っ払いの重心をグチャグチャにしようとしていた。

「結果、ふわりと体が浮いたところを突き飛ばされた可哀想な彼は

……」

「……可哀想なことに予想以上に可哀想な目にあってしまった、と」

二人は顔をあわせる。

「「……可哀想なことしたな」
「坊」

マスターが親指を立てる。

「来週、夫婦漫才の大会が教会前広場であるんだが」

「マスターちよつと店の心配しろよ潰れすぎてんのに慣れすぎてんだろ」

そしてこの空気をどうにかしてほしい。

荒くれものどもが酒っ気を飛ばして小動物のように息を潜めて
いるんだが。

もっとも、ディオが何かやった、ということがわかっているもの
はないのだろう。もしディオが足払いをかけただけならまだしも、
イザドラの「トント」が強烈すぎてさっぱり印象に残ってないに違
いない。

さて、もし自分が楽しくおかしくお酒を飲んでいたら、突然騒ぎ声が響いて、大の男が子供に遊ばれたタンポポの綿毛のように飛んできたらどう思うだろう。

ディオならその場で石のふりをする。

戻れなくなるかもしれないと思うくらい真剣に真似する。

「坊」

マスターがブイサインをする。

「ちなみに漫才大会の賞金がなかなかの額なんだが」

「あれーマスターも俺の話が聞こえなくなってるぞ!？」

全力で驚いて見せるディオ。

いつの間にか元の席に戻っているイザドラ。

「マスター。キャベツの奴おかわり」

「どさくさ紛れにふざけるんじゃありませんわよ無一文コラ!」
「心配するな、ちゃんと分けてあげるから」

イザドラは恐ろしく冷たい目になって、続ける。

「芸をしたらな」

「俺! の! 財布! 代金! 俺の!」
「坊」

マスターがキャベツの小鉢を出しながら言う。

「副賞は銘酒『小春日和』なんだ。それが欲しい」
「マスターせめて何か取り繕ってくれ何か小さいもので良いからハードボイルドを身に纏って！」
「テイロリロリン、クエスト『初めての共同作業』が発生しました」
「何語だ！ イザドラそれどこの世界の言葉なんだ教えてくれ！」
「はい、あーん」
「いらねえよ！」
「はい、おっぴょっぴょー」
「してやるつか！ ここでしてやるつかそしたら俺の話を聞くか！？」

もうヤダ。

もうお酒ヤダ。

お酒、嫌な奴、話聞かない。イコール。

だからお酒呑んで忘れる。キヤーゴウリテキー。

と、デイオの脳裏で健康によろしいようなよろしくないような条件付けが結ばれた。

「もう知らない！ もーしーらない！ 夫婦漫才の話禁止！ あーやだやだマスターお酒！」
「デイオって酔ってテンパるところなるのか……」
「男の醜態をな、あんまり見てやるモンじゃねエぜ、嬢ちゃん」
「唐突にハードボイルド復旧させんなよ！ あ、いま変な顔したな！ クソまた夫婦漫才っていつつもりだな！ くそ言わせねえぞ次言った奴はグーパンなグーパン！ 夫婦漫才って言った奴ぐーうー」

「ぱーんーちー！」

「よしよし、良い子だから泣かないの」

「坊、肉食うか？ おごるぞ。上手いぞ」

「優しさという名の凶器！」

「おいおい」

ふらり、と。

「うちのモンがバカやらかしたっつーからきてみりゃあ、なんだコリヤ。漫才大会の予選か？」

その男はイザドラたちの横に居た。

「ッ！？」

「夫婦漫才大会って聞いてたのによ。トリオも出れんのかよ、きいてねえって。エリーと打ち合わせやり直しだな」

ぞつとするような。

怖気がするような。

そういうものを、気配を殺せる人間はもっているものだ、今までの経験からイザドラは思っていた。いままでそこにいなかった分、現れた途端、なにかをそこに撒き散らしてしまう。いなかった分の空白に、より鮮烈に印象付けて散らしてしまうもののだと、理解していた。

だからぞつとした。

怖気がした。

「いつから……」

じゃ、ない。

いつ着たんだとしても、こんなに何も感じないなんておかしい。

いつから居たのかわからないのに、わからなくて良いような気分になるなんて、怖い。

男は、そう理解してからじゃないと恐怖できないくらい。

普通に、そこに居た。

「まったく、ただでさえ優勝候補が手ごわいつてのにな。あれ、ディオ。ヴァレリーちゃんと一緒じゃないのか？ おいおい相方まで変えてくるのかよこりやガチの接戦になるな。厳しいぜー。前年度チャンプはもうちょっと手加減しろよなー」

「ん、あれ、どしたよ。ホラ、お前の親友ですよ。夫婦漫才大会永遠の二番手にしてお前の後ろから狙うものリックですよ。夫婦漫才の妙手と名高いながらも毎回お前に負けて涙をのんでるリック・ホークリスですよ」

「クソ、ライバルには声もかけねえってか。しかしうれしいぜディオ。俺のことをそこまで買ってくれてるとは。俺はいつもおびえてたんだ。俺たちの渾身のネタ。入魂のシバキ合いを遠めに見ながらお前は冷笑しているんじゃないか。夫婦漫才の帝王の、歯牙にもかかってない、視界に入りすらない俺たちなんじゃないかって」

「……………」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8265i/>

ドラゴニック・クレイモア

2011年11月16日17時24分発行